
雪の降る街

はなぶさ陸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の降る街

【Nコード】

N7230K

【作者名】

はなぶさ陸

【あらすじ】

世界の気温は著しく低下し、両極に近い土地は氷床に覆われている。日本の沖縄を除く全土が冷帯化した。氷河期への前兆と騒がれる世界で、恋をする人々がいた。世界が終るその日まで・・・

とても寒い冬はそれは長くて、

世界は氷に埋め尽くされた。

二月ではあるが、それでもここまで積もりはしない。もう二メートルは積もっているだろう。

白く染まった街に足を運ぶ。いつもはこんなにも降りはない雪。この地域は冬でもここまで雪が積もることも、こんなに冷え込むこともない。精々積もって三〇センチ。十数年前は一メートル積もつたらしいが、幼かったのでよくは覚えていない。

「慧」

ギョツと腕を掴まれた。少年がその方を向くと、少女が一人。慧と呼ばれた少年は笑顔を見せ、二人は雪の街に消えていった。

世界は三年前より大規模な寒気に包まれ、氷床が広がった。政府に公式発表ではこの寒気は氷河期への前兆であるという見解がなされていて、原因も解決策も分かっていない。そのため当時の政府は解体に追い込まれ、新政府になっても現状を打破できず。

日本では空気が乾燥し、森林に大きな影響が出ていた。

当時は交通機関が完全に停止し、日本海側を中心に積雪で家屋が倒壊する事故が多発。それによる犠牲者が多く出た。また、海外では特にヨーロッパや北アメリカを中心に氷床が広がり、それによる混乱と被害が出ている。その支援に国連が動こうとしたが、国連加盟国の大半が国政に追われたため、支援は予想を遥かに下回って自国で解決するしか他ならなかった。

それは日本にも言えることで、自衛隊を派遣するにも日本国内で人員が不足していたためやむを得ず手が回らなかった。

「にしても、寒いねえ」

愚痴に似たそんな言葉を溢しながら、淹れたてのコーヒーに口をつける。あまりこのような贅沢は出来ないが、たまにはとコーヒー

を淹れたのだ。冷害より三年、コーヒーなんて滅多に飲めるものではなくなった。豆が以前よりうまく出来ず、生産量も減っている。

一息つくとまだ仕事が残っているからと、建てられたテントから、分厚いジャケットを着た青年が雪のちらつく中飛び出していった。地方に派遣された自衛官である彼は自衛隊に入隊して三年、こうして地方を周り、支援活動に精を出していた。

「足立、もう良いのか」

上官の池端が青年に声をかける。池端の額には縫った跡が残っている。以前の災害救助で子供を庇った時負った傷らしい。池端曰く勲章だそうだ。

足立と呼ばれた青年は、はい、と元気よく答え、再び雪かきに精を出す。お年寄りが多いこの地域では、屋根の上の雪かきが出来ず、重みで倒壊することが多々ある。そのため、地域の自治体と協力して屋根の雪を降ろし、倒壊を未然に防いでいる。

上官の池端が頑張っているのに、いつまでも休んでいるわけにはいかない。

足立敏幸はこの地域の出で、何か力になりたいと自衛隊に志願した。今や人手不足の自衛隊は来る者拒まずといった感じで、敏幸も一発合格した。自衛官になったからといって、銃が使えたりということはなく、地方に飛ばされては雪をひたすらかいていた。完全にボランティアのような存在になりつつある自衛隊ではあるが、給料はそれなりにももらえたりもする。

人の役に立ちたいと莫大で曖昧な夢を持っていた足立にとってこの仕事は、充実感と快楽に満たされていた。これはまったく自己中心的な気持ちだが、それでも足立はこの仕事を楽しいと感じてしまふ。

主にライフラインの確保が自衛隊に課せられた任務なのだが、下っ端の足立には知識も経験もないし、そんな大事な仕事を任されるわけはなかった。若い者は汗をかいて奉仕しろとのことだ。それに対して足立にとって不満はない様子で、体を動かしている方が自分

には合っていると感じている。

「よく降るな」

そんな愚痴を溢しながら、スノーダンプで道の雪を押ししていく。氷床が広がって陸地が増加した。北海道と本州は陸続きになってしまっている。氷河期に近い状態にある世界の気候ではあるが、日本海側は非常に積雪量が増加していた。一般に氷河期であれば、空気が乾燥し雪はそこまで降らないと言われている。

だが、未だ対馬海流が健在で雪は留まることを知らない。ほとんどの地域で平年以上の積雪量だ。通常夏は降らないが、冬季が長くなっている。それでも日本に大した被害はなく、積雪量が増えたくらいだ。

いくら雪をかいても、かいた側から積もっていく。池端もくそと吐き捨て、除雪していく。こんな状況では土気も下がり、腐ってしまふ。足立も同じ心境で、いくらやっても終わらない除雪作業に手を焼いていた。

それでもやらないよりかはましか、と気持ちを入れ替えて作業を続ける。他の自衛官も池端がやめない限り、手を止めることはしなかった。

なんだかんだ作業を続けること一時間。雪が強く降り出し、視界が次第に悪くなっていく。

「おい、足立。今日はもう終いだ。戻るぞ」

テントを降ろし、テントの脇に道具を固める。テントを残し空き地から、深緑のジープに乗り学校に向かった。市立氷上中学校。この市にある中学校の一つだ。校舎を新設してから二十年程しか経っておらず、まだ綺麗だ。外壁は赤い煉瓦に覆われ、内装は木。そのの宿直室と二階の会議室を借り、そこに支部を置いている。本部は伊丹にある。

中学校に到着し、長靴を履き替え校内に足を踏み入れる。それは少し違和感があり、中学校とはもう無縁の人間がこうして中に入るのには抵抗みたいなものがある。

時間は午後四時過ぎ。今日はこれ以上の活動は出来ないと読み、本日の仕事は終了となった。足立は宿直室のシャワーで汗を流し、タオルを肩にかけたまま部屋を出る。髪はまだ濡れている。

「あ」

そこで女性教員と鉢合わせる。今年の春から赴任してきた西口和だ。和と書いてまどかと読む。初めて名簿を見た時はどうして読むのか分からなかった。美人でスタイルも良いのだが、きりつとした目から和の性格が滲み出ている。また、その立ち振る舞いから真面目そうで、足立にとっての第一印象は固い人。

彼女は大学を卒業してすぐに採用されたので、まだ二二歳。足立は大学を卒業してから自衛隊に入隊したので和とは三つ違いだ。

「そんな恰好で校内をうろつかないでください」

会って早々眉間にしわを寄せ、まるで生徒を注意するかのように言われてしまう。校内に活気はなく、生徒たちはもう帰宅している時間だ。積雪の影響で下校時刻が速まっている。この時期は授業が終わり次第下校しなければならぬ。

「相変わらずキツイね。もう少し優しくしないと生徒から怖がられるよ」

冗談交じりに言ってみせるが、和の表情は更に険悪な方に変化する。すごい剣幕だ。

「冗談、冗談。怒らないでよ」

足立は両手の平を和に向けながら、どうどうと宥める。冗談と言わないと冗談だと分らないような和は、かなり融通が利かない。それ故に真っ直ぐな性格で、温和や柔和なんて言葉は当てはまりそうにない。

和の表情は少し緩み、拳は収めてくれたみたいだ。言えば分かってくれるので、それだけは助かるところだ。

「今日はもう帰り？」

話を変える。そうしないと再び拳を握りかねない。和の手には紙袋を提げ、肩にはバッグをかけている。ええ、と短い返事を返す。

足立の表情が緩んだ。笑みを口元に浮かべた。

和はその口元を見て、ぎくりと息を飲む。和は体の方向を変え、駐車場に続く扉に向かおうとする。

「今日、夕飯でもどう？ 驕ってもいいけど」

足立と和の距離は五メートル程。この距離で聞こえなかったという理由に通じない。断ればいいのだが、特に断る理由が見つからず、これまでずっと何かにつけて断ってきた。それはもちろん嘘をついたこともあったが、基本的に嘘をつくことを良くは思っていない和は無碍には出来ない。

どう答えるか悩みあぐねていると、足立は以前のことを思い出し、俯いてしまった。

これまで何度も断られてきた足立は、どうせ今回も、という気持ちが当然あった。それに付き合ってもいないし、教師同士という仲間でもない。断られるのは道理で、半分諦めていた。それでも言ってみるだけとは、顔を合わせるなり食事に誘っている。

外は雪が降り、空は薄暗くなっている。

「分かりました。今日だけです」

少し無愛想にそう和は言う。足立は口を半開きにしたまま固まっている。

「ちよつと聞いてます？」

和は足立に声をかける。足立は予想外の返答に一瞬動揺してしまっ

た。

「ああ、ごめんごめん。てつきり断られると思ってたからさ」

頬を引っ掻きながら、照れくさそうに和を見つめる。

「そこまで失礼じゃないですよ。今日は予定がないので、たまたまです」

和も頬を赤らめながら否定する。完全に凶星の反応。足立もそれを感じいたらしい。

「もしかして、凶星だった？ 断る理由探してたとか」

瞬く間に和の顔が真っ赤になる。ぐつと拳を握る。凶星に凶星を

つかれ、怒りの感情が再び上がってくる。足立は、ごめん、と一言謝り、和の拳を手取る。

「じゃ、ちよつと待つて。すぐ着替えてくるから」

足立は小さくステップを踏み、上機嫌で階段を上っていく。会議室は二階にあり、そこに寝泊まりしている。

あんな楽しそうな姿を見ると、今後断りずらくなってしまう。その後悔した和。しかし、今まで断った時に見せる切なそうな寂しそうな顔も中々耐えがたかった。

別に足立のことが嫌いなわけではない。でも、どこかそういう関係には成り難かった。単純に足立の軽い感じの性格に合わない。それが理由だった。よく友人からは固いし、真面目すぎると言われている。

別にそんな気はないのだが、外から見るとそう見えてしまうらしい。確かに少し融通が利かない部分はあるかもしれないけれど、それが今まで当たり前だったので急に変えることなどできない。

大きなため息をつく。いや、出たというのが正しいか。

その場に立ったまま、握られた手を開く。今まで肩に力が入っていた。

階段から足音。思ったより早い。和は階段のように目線を送る。

「あれ、確か三年生の・・・」

紺のブレザーを着た女子生徒。まだ、自分のクラスと担当教科の授業の生徒以外は分らない和だが、彼女のことは知っていた。

「山埜雫さん。もう下校時刻は過ぎてるのよ」

傍と口調がきつくなっていることに気が付き、いけないと気持ちを切り替える。

「早く帰らないと、親御さんが心配するよ」

笑みを作り、下校を促す。雫は和を一瞥し、下駄箱で靴を履き替え外に出て行った。

暗い感じの子。それが初めて廊下ですれ違った時の感想だった。それから偶然名前を知り、それ以来彼女の姿を見るたび目が追って

いた。

一度も笑ったり楽しそうな姿を見たことがない。どこか危なっかしい。そんな気がしている。でも、彼女の秘密に触れれば、彼女を壊してしまうような気さえしていた。

だから、彼女に話しかけようにも出来ず、気にはかけている状態だった。彼女からいつか話してくれれば。そんな淡い期待をしている。

雫を見送つてすぐ、足立が慌ただしく階段を下りてきた。

「お待たせ。じゃあ、行こうか」

少し息が上がっている。そんなに急がなくてもよかったのに。そう和は思いながら、俯いた。足立は和が落ち込んでいる、いや怒っているように思え、恐る恐る問いかける。

「もしかして、まだ怒ってる？」

いえ、別に。と返事に元気はなく、さつきとはまるで様子が異なる。

駐車場に行き、ジープに寄る。この不景気の中、なかなか高い買い物はできない。足立は池端に車の利用許可を取り、こうして和との食事に向かっている。

キーを挿し、回す。エンジンがかかり、サイドブレーキを上げ、ブレーキから足を外す。ゆっくりと車体は前に進み、学校の駐車場を出る。公道に出て、市内の方に向かって走り出す。

結局、和は希望がなく、足立の一存で中華になった。場所は和も知っているらしく、ナビはいらない。

相変わらず和の表情は暗く、まるで今の空のようだ。足立は見ると見かねて、いくつか質問を投げかけた。何か悩みがあるのは明確で、それを聞き出そうと試みる。

「教師は楽しい？」

すごく大雑把な質問だ。和は少し間を置き、楽しいけどシンドイ、と答える。

「何がシンドイの？」

毎週の小テストの作成だとか、担当のクラスのことだとか。愚痴交じりに答えてくれた。和は聞きもしていないのに次々と、あの先生のあれが駄目だとか、あのクラスは授業中にこんなことをし出すとか、いろいろ話してくれた。

さっきまでとは違って、少し表情が柔らかく明るくなったような気がする。大分内に溜め込んでいたみたいで、あれやこれやと話をしている。

足立も黙って相槌を打ちながら話を聞く。あれやこれやと話していくうちに、一瞬表情が再び曇った。

「悩みとかあるんでしょ」

今まで黙っていた足立が、雪降る道に目を向けながら言う。

和は口を紡ぎ黙ってしまった。車内は静まりかえる。ワイパーの動く音が大きく感じた。

「我慢はよくないよ」

足立はそれが何なのかに、あまり興味はなかった。知ったところでどうしてやることも出来ず、ただ黙って聞いてやることしか出来ない。別にカウンセリングをしているわけではない。そんな大層なものが自分に務まるわけではない。

そう思っているけど、そんな顔をされたら夜も眠れない。それが気になっている異性ならなおのこと。いつも元気でいてほしいと思うだろう。

我慢はよくないよ。そう足立は言ってくれた。和はそれが堪らなく嬉しかったが、悩みを口から出そうになるのを抑えていた。

理由は、これが自分の仕事だから。生徒の悩みを聞いてあげる。その原因を解決までとはいかなくても、現状をどうにか良い方向に向かうために力になることが出来る。そう思っていた。これは教師である私の仕事。だから、彼に助けを求めてはいけない。

かなり馬鹿げた理由かもしれないが、教師になったからには教師である自分が生徒のためにならなければ。そんな思いが胸にある。でも言いたい。聞いてもらいたい。それに彼なら黙って聞いてく

れるし、彼女とは関わりはない。

「あの、その」

言いかけて止まる。果たして本当に良いのだろうか。信号が赤に変わり、ブレーキを踏む。

足立は確かに軽そうだが、芯は真面目で親切で優しくて。頑張っている。

あれ、私は何を考えているの。和は頭を二三振り、頭を切り替える。

はたと脱線したお頭を切り替えた和は、助手席の足立に目を向けた。

一瞬どきりと鼓動が跳ねる。真っ直ぐな眼差しが和の眼を捉えていた。真剣な表情でじっと見つめる。

心拍が徐々に早くなり、音も大きくなっていく。足立に聞こえるかもしれない。逃げるように、和は視線を前方に向けた。

「信号、青になりましたよ」

前の車が動き出した。

「あ、ああ」

足立は前を向きなおし、アクセルをゆっくり踏み踏む。

落ち着いて、息を整えて。車内の暖房が暑く感じてくる。和は手ではたばたと顔を仰ぐ。

市内の駅前。近くの駐車場に車を止め、店に徒歩で向かう。とはいっても三〇秒。外は大分気温が下がっていて、コートを着ていても寒く感じた。

足立はジーパンロングTシャツ。その上に茶色のジャケットという如何にも取って付けたような服装。髪を乾かすのに思ったより時間がかかり、急いで服を着てきたせいだ。選ぶ時間も裂いて、待ち時間を削った。

奢りということで財布は車内に置きっぱなしで、和は白のコートだけ羽織った。

さっきの続きが気になるところだが、寒いので店に入ってから。

暖簾をくぐり、扉を開く。らっしやい、と少し年配の男性の声がある。

「大将、久しぶり」

「おお、敏志んとこの敏幸くん。よう来たな」

笑顔で出迎えてくれたのは、中華飯店『宿恋』の店長、安田孝道だ。いつも大将と呼ばれ、それが完全に定着している。

大将は敏幸の父・敏志と高校の同級生だ。仲が良く、卒業後も機会があれば遊んだりしていた。そして中華料理屋で修業していた大将が自分の店を持つことを知り、不動産会社に勤めていた敏志は、駅前土地を安値で譲った。

駅前に店を構えて三〇年弱。未だに客足は途絶えず、人気の店の一つだ。

店内は狭く、カウンター席しかない。それも一五席程。もともと土地が狭く、そこに建てた店は必然的に狭くなってしまった。それでもお客と店の従業員が近く、楽しく話せるという利点がこの店の人気の一つだった。

料理もさることながら店長の人柄も良く、よく悩みや相談事を聞いてもらうために足を運ぶ客も少なくないと聞いている。

三人しか客はおらず、一番左の席に和を座らせ、足立もその隣に腰掛ける。

「何食べたい？」

足立は座るやすぐに壁に貼ってあるメニューを指しながら問う。

和は少し悩み、酢豚と餃子と答えた。

「大将。酢豚と唐揚げ。それと餃子を二つ」

はいよ、と大将は返事をし、調理を続ける。その手際は素晴らしいもので、無駄がほとんどなく、次々にオーダーを消化していく。先にいた客三人はどうやら同僚らしく、会社の愚痴や不満を溢している。

まずは餃子が運ばれる。目の前に皿が置かれる。何とも香ばしい。小皿にたれを二人分作り、片方を和の方に渡す。外はパリッとして

いて、中はジューシー。見たままのうまさだ。

和も一つ箸で取り、たれを付けて一口。おいしい、と自然にこぼれる。足立はそんな和の言葉を聞いて、ほっとする。

「ここ、親父とよく来てたんだよ。親父と大將は高校の同級生で、この店が出来た時の来客一号だったんだ」

足立は熱々の餃子を食べながら、そう教えてくれた。和は初めて足立のことを聞いた。今までは足立が一方的に話しかけ、和だけ自分のことを話していた。それを足立は聞くだけで、自分のことは一切話さなかった。

話したくないのかもしれないと、和は木をつかっていたがそうではなかったようだ。

唐揚げ、酢豚の順で料理が運ばれてきた。その間、足立は実家の話だとか、学生時代の話だとかをしてくれた。今まで知らなかった足立のことを知った和は、今まで以上に足立が近い存在になった。

「高校の時はここでバイトしてたなあ」

「そうだ、そうだ。勝手が分かってるから、他のバイトより断然使えたな」

大將は、知りすぎているのも少しまずいかな、と付け足す。勝手を知っているが故の悪さ。

「でも、今は雇ってねえんだろ？」

「今は不景気だからな。雇う余裕がないな。お前なら大歓迎だが」この雪の影響で客足は落ち気味らしい。冬場の客が少ないため、冬の間はあまり店を開けないそうだ。

一通り料理を満喫して、お冷を飲む。

「それで、悩みて何？」

客は足立と和以外おらず、大將と三人だけだ。自然に言っただけだったが、和はさっきまでのようには話してくれない。

和は少し俯き、小さい声で話す。

「私が持っているクラスではないけど、気になる子がいるんです」
「男子？それとも女子？」

「女子生徒。いつも悲しそうな顔をしていて。あいさつしても返してくれないし」

声は弱弱しくなり、最後の方はほとんど聞こえなかった。だが、足立は和の悩みがなんなのか、理解できた。

ようは学校に馴染めていない生徒がいて、その子が心配で堪らないらしい。俺から言わしてもらえば、他のクラスの生徒のことなんて、そのクラスの担任に任せておけばいい。そう思ってしまう。

真面目な和のことだろう。その子と今日も会って、いつもと同じような感じだったから、更に不安に思ってしまった。虐めを受けているのではないかと、虐待を受けているのではないだろうかとかいろいろと考えてしまう。

「そう、返してくれないんだ。名前は？教えてくれない？」

足立は優しく笑む。

「それは駄目。絶対その子を探したりして、話をする気でしょ」

勘が鋭い。図星をつかれた足立は、しない、と否定するも和は教えてくれそうになかった。なら、その子の特徴をもっと聞き出して探すしかない。

「他にはどんな感じの子なの？」

「どんな感じ……。暗くていつもどこか遠くを見てる。あ、綺麗な子だと思います。女の私から見ても」

美人で不思議な子。どこか遠くを見ているというのは、恋煩いか何かなのでは？そう思った足立は更に突っ込む。

「彼氏とかいるんじゃない、そんな可愛い子だったら。俺ならほっとかないと思うけど」

急に和の顔がきりりとする。鋭い眼光がこっちを見ている。

冗談、冗談。そう言って和は少し警戒を緩める。

「彼しかどうかは知らないですけど、毎日校門で彼女のことを待っている高校生の男子がいます。私が赴任してきた頃からずっと」

その子待つ男子高校生。年上に彼氏か。でも、付き合っているとすれば恋煩いではないだろう。では何だ。彼女には妄想癖でもあ

るのか。妄想癖があるのは俺か。

頭の中で考えてみるが、状況がよく分からない。足立からしてみれば、彼氏がいて毎日迎えに来てくれて。楽しいに決まっている学校生活が、何故そんな憂鬱に思えてくるのか。まったく理解できなかった。

気がつくとも和が顔を覗き込むようにして、心配そうに様子を窺っていた。

「あの・・・」

言いたいことは何となく理解できた足立は、笑顔で答えた。

「大丈夫。別に詮索はしないからさ」

たぶんあまりこの状況が悪化することを好ましく思っていないらしい。首を突っ込んでいいのか、何もせずに見守った方がいいのか。そんなこと他人には分からない。本人がどう思っているのかなんて、本人以外誰も知らないのだから。

「あまり詮索しない方がいいと思うんですけど、ね・・・」

「そうだね。まあ、あまり心配しなくていいと思うよ。その子も親しい人はいるみたいだし、その高校生に相談とかしていると良いけど」

和にカウンセラーの真似事など出来ないし、それは足立だって同じだ。でも、話を聞いてあげるくらいのは出来る。

「少し話をするだけでも、大分違うと思うよ」

うん。和は小さく頷く。不謹慎かもしれないが、美人の悩む顔も落ち込む顔も見えていて飽きない。面白いとは違い、そんな顔も綺麗だと思ってしまう。

足立は、話はここまでと宣言し、これ以上は触れなかった。その代わりなのか、また小さい頃の話を持ち出し、面白可笑しく話してくれた。和にとってそれだけでも大いに気持ちが軽くなり、話して良かったと思えてきた。

大將が少しまけてくれたお陰で、思ったより財布に残った。足立が、今度は飲みに行こうか、と誘うと和は少し照れながら言う。

「暇なら」

足立は思わず吹き出し、笑いだした。見透かされたような気がして、和の顔は更に赤くなった。アパートに着くまで俯いたままだった。

山笠慧は強烈な悪寒で目が覚めた。どうやら足が布団からはみ出たしまっていた。昨日の夜から熱が出て、寝込んでいた。

時計に目をやる。午前五時。悪寒はするが、昨日よりはずっとマシだった。重たい体を起こす。

「あつ」

ベッドの脇でうつ伏せの状態で寝ている妹の姿が目映った。すーすーと音をたて、まだ眠っている。昨日、一晩中付いてくれたのか。

慧はそつとベッドから出て、彼女を抱き抱える。ベッドに寝かせ、布団をかける。起きる様子はなく、気持ち良さそうに眠っていた。慧は部屋を出た。

体が重く頭が痛む。それでも昨夜よりは断然弱く、我慢できる範疇だ。少しは薬が効いたようだ。汗をかいていたので、シャワーを浴び、清潔な衣服を身に付ける。風邪がこれ以上悪化しないように、いつもより厚着だ。リビングの暖房をオンにして、台所に立つ。食事は妹には任せられない。以前任せたところ、キッチンは大惨事になってしまった。昨日もおかゆを作ると言ってくれたが、台所に行き、自分で作った。

妹に嫌われようが、そんなこと知ったことか。もし怪我でもすれば、そう思うと心配で不安でいてもたってもいられない。過保護かもしれないが、それでも心配でたまらない。

両親がいない自分にとって、妹は唯一の家族で、それは妹も変わらないだろう。

それに妹とは義理の兄妹だ。両親とも慧とも血は繋がっていない。孤児だった子を引き取ったのだ。

慧の母は慧を産んだ際、子供を産めない体になってしまった。正確には、産めば命の保証はないと言われた。慧を産んだ時も、産めば母体が危機にさらされると言われた。

そんな時、父は反対したが、母は産みたいと思ったらしい。奇跡的に母体も慧も助かった。だが、父にもうこれ以上は心配をかけたくないと、避妊手術を受けた。

しかし、子供が欲しくなった。それは母も父も思ったことらしく、慧に兄弟を与えたかったらしい。一人っ子よりも二人いた方が、寂しくないと考えたそうだ。

それでたまたま紹介された孤児院を訪れた時、雫に出会った。雫は父親が誰なのか分からず、母親一人で育てられた。しかし、育児のための資金が足りず、母親は働き詰めになった。我が子のためにその一心で働いたが、それが祟ってか過労死した。

当時二歳だった雫は孤児院に入るよりも、山埜家に引き取ってもらった方が良いと判断されたらしい。山埜家も大いにそれを喜び、即断で雫を受け入れた。

とても優しい両親は、雫を差別したり虐待したりしなかった。我が子同然で可愛がった。過保護ともとれるようなその愛情の注ぎようは、慧以上だった。慧はそれを良くも悪くも思わず、お兄ちゃんだから我慢しないと、と子供ながらに思っていた。なんとも可愛らしいことだが、妹を優先に生きてきた。

そんな幸せの中、事件は起こったのだ。

慧が小学五年、雫が四年生の時、冬のある日。その日の前日に雪が積もり、十二月には珍しく三〇センチは積もった。

当日、妹のピアノの発表会があり、両親共々四人で会場に向かっていた。当然、車でタイヤは冬用だ。ピアノを始めて、父親が見に来るのは初めて。雫もそれが嬉しくて仕方なかった。

車の中ではいつも以上に騒ぎ、落ち着きがない様子。

トンネルに入り、ライトを付ける。暗いトンネルを抜けて、外に出た。緩いカーブに差し掛かる。右カーブだ。

クラクションが鳴る。車が急ブレーキをかける。

凄まじい衝撃で前方のシートにぶつかる。雫と慧は後部座席で話をしていたので、まったく前方を見ていなかった。

一体何が起こったのか。二人は理解できなかった。

「おとう・・・」

状況を聞こうと運転席に座る父親に、慧は問おうとした。

しかし、父親はエアバックとシートとの間に挟まれ、頭から血を流していた。首に力がなく、ぐったりと倒れている。フロントガラスには全体にヒビが入っている。

「お母さん、お父さんが」

母親も体を挟まれ、意識がない。雫はと慧が目を向けると、頭をシートにぶつけて、頭から血を流していた。すぐに雫を連れ、車から降りる。雫は未だ何が起こったのか分からない様子で、慧に連れられるまま外に出た。

慧たちが乗っていた車が潰れ、その先には大型のトラックが止まっていた。そのトラックも前方が潰れていた。トラックの運転手はあわてた様子で、電話をかけている。

少しして、救急車のサイレンの音が近づいてくる。パトカーや消防が忙しく動き回る。

慧も割れたガラスで頬を切っていたが気にはならず、雫を乗せた救急車と一緒に乗った。

覚悟は出来ていた。

雫の治療をし、慧も頬に絆創膏を貼り、雫を連れ霊安室に連れられた。白い壁に二つの台の上に二枚の白い布がかけられていた。

慧は雫の手を強く握った。握った手に力が知らずに入り、雫もそれを感じ取った。二人は無言でその場に立ち尽くした。

それから、親族による葬儀が行われた。

父方の親族が葬儀を取り持ち、母方の親族も多く参列した。

「あの子が引き取った？」

参列した大人たちが話しているのをたまたま耳にする。

「あの子のピアノの発表会に向かう途中で事故に合ったんですって。気の毒に」

「引き取らなかったら、こんなことはなかったのに」

「子供が産めなくなつて、今度はこんなことに」

直接には名前を出さないが、雫に対する陰口に他ならなかった。大の大人が。そう慧は思つてしまう。

それに悪いのは雫ではなく、車線をはみ出してぶつかったトラックだ。それを雫がいたからと。雫のせいだと。そう言っている。そのようにしか聞こえない。

父方の親族である、父の姉にあたる人の家族に引き取られることになった。が、慧も雫もそれを拒否した。しつこくは引き取ろうという気はなく、元の家に二人は戻った。

そこで初めて二人で涙を流した。

静まり返った家で。温かさのない家で。二人のすすり泣く声。

小一時間は泣きあかし、目は真っ赤になっていた。どんなに悲しくても、お腹は空くもので。慧は台所に立つ。料理の知識なんて、母親の手伝いをしていた程度のもの。何か作れと言われても作れるわけはなく、財布を持って家を出る。

母親の財布を手にコンビニエンスストアに向かい、そこでおにぎりサンドウィッチ。ジュースやお茶は冷蔵庫にあったので買わない。

コンビニのレジ袋を片手に家路を歩く。その足取りは重く、とても弱い。

家の前で妹の雫の姿があった。雪を踏む音に気付き、雫がはつと顔を上げて走ってくる。その勢いのまま、慧に抱きついた。

うつと噛み殺した声で泣いている。

「一人にしないで」

ぐつと腕を掴み、堪えるように泣いていた。慧も思わず、泣きそ

うになる。それを堪え、呟く。ごめん、と。

それから五年。高校一年生と中学三年生に成長した二人は、両親亡き後変わらぬ家に暮らしている。今でも家の中は静かだ。それでも以前のような寒さや寂しさはなく、楽しく暮らしている。

しかし、冬を迎えると、雪を見ると、あの日の記憶が蘇ってしまう。血に滲むあの惨状。

はあと大きなため息がでる。振り切ったつもりでも、未だに頭から離れない。

鍋に水を張り、ダシの素を入れて火にかける。昨年コンロからIHに替えた。乾燥する冬場に火事が起こり易く、政府でもIHを進めている。政府の公的援助もあり、買い替えに踏み切った。

大根を切り、卵を割る。切った大根を鍋に投入し、左にフライパンを温める。卵を溶き、醤油とダシを混ぜる。熱したフライパンに油を引き、卵を流し込む。それを綺麗に畳み、卵焼きを作り火を止める。大根が軟らかくなったら、豆腐を切って入れる。味噌を溶き入れる。

たたたと階段を下る足音。

「ごめん、寝坊した」

慌てて雫がキッチンに入ってくる。髪の毛はバラバラで、手櫛で直している。肩まで伸びた髪がふんわりと揺れる。綺麗な少し赤みがかった髪と整った顔立ち。細身で女性らしい体付き。当然毎日見ているから多少の変化には気が付きにくいだが、ここ数年ですつと女性らしくなった。女の子は成長が早いと聞くが、思ったよりずっと早かった。

異性として意識し始めたのは、雫が中学二年生になった頃だった。妹だという自分で引いていた線を越えてしまった。壁が壊れてしまった。

クラスでもよく雫がかわいいと話になっていた。いいよな、お前は。そう言われることが多々あった。それから何となくそんな気持ちで雫を見始めてから、だんだん意識するようになっていた。

好きな子の前では緊張してしまう。それが妹でも同じ。毎日会っていても、緊張してしまう。今は慣れたが、たまにドキッとしてしまうことがある。

「と言うか、慧は風邪ひいてるんだから休んでて。後は私がやるから」

そう言ってお玉を取り上げ、慧の背中を押してキッチンから出す。慧ももう料理は出来ているから心配はなく、リビングのソファに腰掛けた。リモコンでテレビの電源を入れる。

「昨夜から降り続く雪は今日の夕方までには止みそうです。雪の影響により交通機関で遅れがあり、高速道路は今も通行止めです」

朝からニュース番組を見る。これはたぶんどの家庭でも同じように日課になっている。交通情報や天気予報は今の生活には欠かせない。知っていなければいろいろと不便だし、いつも携帯電話などで情報をチェックする必要がある。

電車が動かなくなることもしばしばで、大抵の駅では暖房管理の待合室が設けられている。バスは今でも運航しているが遅れることは毎回で、このシーズン利用客はあまり少ない。かといって自家用車を利用する人も少なく、あまり家からは出たくないようだ。

それでも学校はいつも通りあり、学生はこの雪の中向かわなくてはならない。まあ、少々の遅刻は多めに見てくれる。学校としても利用できる交通手段が電車やバスくらいでそれも大した当てにはならないので、学校が通学用のバスを手配している。

今日もバスが向かいにくるので、通常通り学校はある。休みの基準は交通機関の停止か警報が出た時だ。これは以前と何ら変わりはない。

休みがこの時期多くなるので、夏休みを二週間程にし、冬休みを一カ月弱取っている。もうすぐ冬休みに入るが、それまでは後一週間ほど猶予があった。

「はい、お待たせ」

テーブルにさっき作った卵焼きと味噌汁が置かれる。雫はご飯を

茶碗によそいながら、テレビに目をやる。現地リポートを吹雪の中で記者が行っている。

「今日も寒そう」

落胆した声で雫はご飯を盛る。

「そんなにいらないよ。食欲あまりないし」

そう慧が言うと、食べないと元気になれないよ、とそのまま慧の前に置く。自分の分は少し控えめによそう。

「雫も食べないと持たないよ」

「いいの。今ダイエット中。冬はすぐ太るんだから」

雫は慧の向かいに座り、手を合わせてから食べ始める。慧も手を合わせ、箸を持った。

いつもこうして二人で朝食をとる。夕食も同じように二人だ。それ以上もそれ以下もない。いつも二人で。

慧は何かお茶漬けでご飯を流し込み、食器を流しに持っていく。いつも洗うのは雫担当だ。料理が苦手な雫は洗うのだけは一人ですると意地を張っている。まあ、慧としてもそれは助かるので、雫に任せている。

市販の風邪薬を水で飲み、ソファに座る。チャンネルを回すが、どれも積雪情報や天気予報ばかりだ。昨日もよく降ったから、一日で四〇センチは積もったか。

テレビを消して、自室に戻る。二日は休むと高校側に伝えてあるので、今日も無理せず一日寝てみよう。

慧はベッドに横になる。昨日あれだけ寝たのだから、すぐには寝付くことが出来ない。

慧。けいではなく、めぐみと読む。苗字と合わせると、やまのめぐみ。

両親が付けた名前はとても気に入っている。だから、山埜の姓が失うのが嫌で、養子になることを断った。姓と名前で一つの意味になっただけの素晴らしい名。それを失うと両親の思いまで踏み渗むような気がして嫌だった。幸い伯母も乗り気ではなかったんで、簡

単に手放された。遺産の管理などはまだ任せているが、近いうちに自分たちで管理しようと思っている。

小さい頃はよく名前で虐められた。めぐみ。女みたいな名前。

そう言われる度に、自分の名前が嫌いになっていった。どうして両親はこんな名前を付けたのか。ある時、母親に尋ねた。

苗字と続けて名前を言ってみなさい。

やまのめぐみ。

そう、山の恵み。苗字と意味が通るようにしたのよ。綺麗な名前ですよ。

その時ほほ笑む母の顔を見て、名前の意味を知った。その笑顔は本物で、とても印象深い。今でも頭に残っていて、思い出すと優しい母の顔が浮かぶ。

そうして考えると、雫を引き取るときも躊躇しなかった。

やまのしずく。山で木から落ちる雫のこと。

綺麗な情景が浮かんでくる。

それを考えると、即決した両親の気持ちは何となく分かってくる。意味が通る名を持つ二人。両親が思いを込めた名。

名は体を表す。その言葉通り、雫は綺麗に美しく育っている。慧もその名の通り、優しく思いやりがあり、相手を理解する心。

目頭が熱くなる。慧はぐっと堪える。一瞬涙が出そうになった。

両親のことを思い出すと、ときどき泣きそうになってしまう。何とも恥ずかしい話だが、未だに悲しさが消えないのだ。

それでもまだ一人でないだけマシで、もし一人なら死んでいたかもしれない。そう思ってしまう。そんな自分が情けなく、恨めしく思う。

階段を上る足音がして、部屋の扉が開く。

「じゃ、行ってくるね。ちゃんと寝てないと駄目だからね」

もう制服に着替えていて、コートやマフラーも装着済みだ。

「うん、分かってる。雫も温かくして風邪ひかないようにね」

「うん。行ってきます」

「行つてらっしゃい」

笑顔で扉を閉め、階段を下りて行つた。いつもはバス停で別れるのだが、その時見せる顔と同じように笑顔だった。今日も迎えに行くことは出来ないが、家で無事帰ってくることを待とう。

慧は布団をかぶり直し、目を閉じた。

家を出て学校に向かう。家からは徒歩十分程にある中学校。雫は雪道を歩いていて。

今日は早く帰らないと。

兄である慧が心配で仕方がない。放っておくとすぐに無理をしてしまう。そんな兄のことが愛おしくて仕方がない。

こんな自分はおかしい。そう思つていても、この気持ちを欺くことはできない。好きなものは仕様がなない。この気持ちまで認めなければ、自分は自分でなくなつてしまふかのようなだった。

学校に着くころには、生徒が疎らに登校しているのが見える。その中に雫も混じつていく。特に親しい友人の姿もなく、下駄箱で上履きに履き替えて教室に向かった。

三年生の教室は二階にあり、学年を追う毎に階が下がっていく。一年生は四階だ。

一階には職員室や校長室などがあり、教員が多く利用する部屋がある。

教室に入つた雫の眼に黒板が映つた。そこには大きな字で、「兄妹の禁断の愛」などと落書きされていた。兄と妹の相合傘など、小学生染みた落書きだ。

雫はそれを見無視して自分の席に座る。鞆から教科書やノートを出し、机に仕舞う。紙のカバーがかかった文庫本を片手に読み始める。慧が面白いと渡してくれたものだ。

クラスの男子が騒ぎ立てる。

今日、兄貴はどうしたんだよ。バス停にいなかったぞ。

もしかして喧嘩か。

痴話喧嘩だろ、どうせ。

聞こえているが、全て右から左に聞き流す。こんなこといつものことだ。無視していれば、いずれ飽きてやめる。

教室のドアが開き、委員長の優香が登校してくる。前髪をピンで分け、後ろで短いポニーを作っている。黒板を見るなり、声色を変えて叫んだ。

「誰よ、一体こんなことしたのは。男子、あんた等でしょ。すぐに消しなさい」

まるで自分のことのように怒る優香は、雫が唯一親しくしている友達だ。慧とも面識があり、家に呼んだこともあった。

男子は無視をして、教室から出て行った。優香は鞆を机に置くと、黒板の落書きを消していく。消し方に今の心情が表れている。

落書きを一通り消した優香は、雫のもとにやってきた。

「雫、大丈夫？」

本を下ろし、顔を上げる。

「大丈夫。もう慣れたから」

笑顔で雫は答える。優香はそれが嘘だと分かった。

雫とは小学校からの付き合いで、お互いのことはよく知っているつもりだ。我慢している時に限っていつも強がる癖がある。雫は絶対人前で泣いたりしない。泣くとすれば、兄である慧の前だけである。

こんな時、慧さんがいてくれれば。そう思う優香は、雫の前に座る。

「それ、面白い？」

本を指差して聞いた。雫は本をめくり、タイトルを見せる。

「慧から借りたの。面白いって。まだあんまり読んでないからわからない」

夏目漱石のころだ。内容は知っているが読んだことはなかった

優香は、何でこんな重たい内容のものを、と嘆いた。

本を読んでいる雫の姿は珍しく、気になった。読んでいるのが、こころだとは思わなかったが、本を読むことが悪いとは言わない。しかし、このご時世内容が重たくて、もう少し明るい内容の本を読めば良いのにと思ってしまう。

慧が本の虫なのは以前から知っていた。優香が雫の家に遊びに行った時、いつも本を読んでいたからだ。部屋も棚いっぱい本が並んでいて、今ではもう溢れているだろう。

優香も本を読むが、慧程ではない。そこまで読むのが早くないし、嫌いではないが取分け好きでもない。

「今日、遊びに行ってもいい？」

優香がそう聞くと、雫は頷く。

チャイムが鳴り、優香は自分の席に戻る。出て行った男子たちも戻ってきて席に着いた。

今日から学校は午前のみ。中学は給食があるが、今日からそれもなくなる。優香と雫は一緒に帰ることになった。優香は自宅に携帯電話で連絡を入れた。

携帯電話は大半の人に持たれていて、その利用率は中学生で九割を超えている。小学生でも五割を超え、高校生ともなるとほぼ十割だ。社会人で持っていない人は探してもなかなか見つからない。

優香も中学に上がると同時に持たされ、連絡用に使っている。GPS装備の携帯電話が大半で、もし事故や災害が起こってもすぐに位置が分かるようにしている。

優香の携帯にも付いていて、もしもに備えている。

「ありがと。じゃあ、帰ろうか」

電話をし終えた優香は雫の隣を歩きだす。まだ雪がちらついていた。

雫と一緒に帰るのは、いつ以来だろう。そんなことを考えながら、雪道を歩く。

それに雫の家に上がるのは、小学生以来だ。優香は、緊張してき

たよつで足取りがどこかぎこちない。

雫は淡々と歩き、優香は離されまいとスピードを合わせて歩く。

「何を緊張してるの？」

雫が単刀直入に聞いた。そこで優香は、ふえ、と変な声を上げた。完全に凶星だ。

「あ、あのね。雫の家に上がるの、小学校の時以来だなんて思つて久しぶりで、ちょっと」

俯き加減にそう答えた。少し赤面した様子で、それを雫に見えないようにしている。それは本当の話で、小学校以来だ。あれから一度も行っていないのだから、緊張もするかもしれない。

「嘘つき」

雫は聞こえない小さな声で呟いた。優香が何と聞き返す。が、雫は何も言わなかった。

歩いて十分。そうして雫の自宅に着いた。洋風で今時の家だ。作るのにそうは時間がかからない、組み立てるだけの家。最近ではそれが主流で、どの家も同じに見える。住宅街なんて最悪で、どの家も同じでまるで模型のように見えてしまう。

画一化された家や整備された道路で、似たような風景がどこにも存在する。自分が今どこにいるかなんて、電信柱の番号を見ないと分からない。

その中でも、雫の周りの家は昔とそう変わらなく、家の形も様々だ。茅葺はさすがに残っていないが、平屋は未だに存在する。

門の扉を引いて中に入る。ポストの中を探り、郵便物がないかチェックする。それを終え、雫は鞆から鍵を取り出し、開ける。

「ただいま」

「お邪魔します」

二人は靴を脱いで、リビングに入っていく。

「ここで待つて。すぐ着替えてくるから」

そう言つて雫は自室に上がっていった。優香は部屋を見渡した。少し部屋の物の配置が違ってくるくらいで、あの頃と変わっていない。

変わったのは、おばさんとおじさんがいないこと。

両親が亡くなってから、優香は何となく行きにくくなっていた。

他人の私が、押し入っていいものだろうか。

当然悪いことはないとは思うが、それでも今行くと気まずくて話なんて出来ない。そういう思いで、なかなか足を運ぶことは出来なかった。

家の中はしんと静まり返っていて、人のいる気配がしない。心がずきりと痛んだ。

寂しい家。静かな家。以前とはまるで違う。あの時は、おばさんがいてお菓子を出してくれて、温かく迎えてくれた。雫も笑っていた。

今では学校で笑っている姿を見たことがない。怒ったところも見えないが、いつも無表情で無関心だ。そんな雫が優香には危なっかしく見えて堪らない。

放っておくと消えて無くなってしまいそう。

階段を下りる足音がする。二つだ。

「お待たせ」

「こんにちは」

着替えを済ませた雫の後ろに、慧の姿があった。

「こ、こんにちは。お邪魔してます」

まさか、家に慧がいるなんて思わなかった優香は意表をつかれる形となった。思わず声が裏返りそうになる。それを何とか戻し、平静を装う。

「慧さん。今日学校はどうしたんですか？」

高校が同じく昼まででも、家から近い雫や優香も方が早く着くはず。早退や欠席をしない限り、ここにいることはなかった。

「昨日から風邪ひいちゃって。もう熱は下がったけど、今日も休ませてもらったんだ」

慧の姿は水色のパジャマに上着を着ているだけだった。少し顔が赤い。それに眼が少し虚ろだ。

「優香ちゃんでしょう？入学式以来じゃないかな、会うのは」

「はい。ここに来るのは、小学校五年生以来です」

笑顔でそう答える優香の眼には、少し俯く慧の姿が映った。しまった。

そう思った時にはもう遅く、慧はすぐに笑顔をつくった。

「お昼、まだでしょ？何か作るから、少し待っててね」

慧は重たい体を動かし、キッチンに向かった。あ、と手を伸ばしたがその手は宙を掴み、優香はその手を下ろしてしまった。

ごめんなさい。そう言いたかったが、慧の笑顔は何も言うなど言っているかのようにだった。だから優香は何も言えずに、立ち尽くすしかなかった。ぐっと拳を握る。

雫は白のパーカーにジーパン姿でソファに座り、テレビの電源を入れた。この時間はお昼の長寿番組を見るのが、日本人の定番だと思っている。もう何十年も続いている。

優香はコートを脱ぎ、畳んで鞆の上に置いた。邪魔にならないように、端っこに鞆共々寄せる。マフラーと手袋も一緒に置く。

キッチンからは良い匂いが漂い始め、空腹だった優香はお腹が鳴りそうになった。

慧は二人のもとに出来たての焼き飯を運んでくる。香ばしい匂いが食欲を駆り立てる。二人は瞬く間にそれを平らげた。

「おいしかったです。ごちそうさまでした」

優香は流しに食器を返しながら、お礼を言う。慧がこんなに料理がうまいなんて知らなかった。毎日こんなおいしい料理を食べられる雫が羨ましく思う。

「お粗末さまでした」

食器を洗いながら、慧は笑顔で答えた。おいしいと喜ばれることは嬉しいことで、思わず顔が綻んでしまう。

洗い終わった後、慧は再び部屋に戻ってしまった。優香は残念そうにその後を見ていた。

雫と優香は何をするでもなく、ただ時間だけが過ぎていつてしま

った。テレビを見ていた優香と雫は、時計に目をやった。

「そろそろ帰るね」

優香は立ち上がり、そう告げる。雫も、うんと頷き、玄関まで優香を見送る。外はもう暗く、雪は止んでいるが昼間より積もっていた。

「気をつけて帰ってね」

雫の顔が少しほほ笑んだ。優香の心が少し温かくなった。

「うん。今日はありがとう。今度は私の家においでよね」

思わず優香まで笑顔になる。そうして二人は別れ、優香は家路を歩いた。

「優香ちゃん、帰っちゃったのか」

雫が振り返ると慧が階段から降りてきていた。手には、一冊の本が握られていた。

「渡そうと思ったのにな」

残念そうに呟き、踵を返し階段を上がっていった。

雫は落ちていた手袋を拾う。優香のものだ。忘れていったのだらう。雫はそれをぐっと握った。

今、国会は大いに揺れていた。冷害が始まってから、二人の総理大臣を挟み、再び総理になった塚本は、エネルギー確保に最初に取り組んでいた。

燃料。つまりは石油やガスなどにあたるそれらは、世界的にも不足気味で、価格も冷害前の三倍にまで引きあがっていた。日本でも価格も引き上げは止むを得ず、ガソリン税を取るとまたバカみたいな値段になるので、ほとんど付いていない。

日本のエネルギーは海外からの輸入に頼っていた。唯一出ていた石炭もとうの昔に無くなり、今や原子力発電のみの電気エネルギーがほとんどだ。

火力発電は一年前に中止され、代わって原子力による発電が推進された。それでも安全面で不安な原子力発電は、設置場所の問題があり地元住人が反対する中、強制的に建設されていた。

原子力発電により何とかなってはいるが、電気の使用量は半端ではなく落ちる寸前だ。政府は早いエネルギーの確保に動かなくてはならない。

しかし、日本に頼れる中央アジアの国は無く、どこも友好的ではない。それは当然で、いつ自国が氷床に覆われるとも分らない今、簡単に石油やガスを分け与えるわけにはいかないのだ。

友好国のアメリカに相談を持ちかけてはいるが、良い返事は返ってこない。

アメリカは中央アジアの国に軍を置き、アメリカの味方を多く作っていた。それも一つや二つではなく、四つもの国を味方に燃料を格安で仕入れていた。

アメリカは9・11以来、中央アジアの国家に戦争を仕掛けていた。テロリストのアジトがあるだとか、核兵器があるだとか、何かと理由をつけて。今思えばそれは言い分で、この状況を見越しての戦争だったという評価が多い。

そう考えれば、先の戦争の理由は納得出来る。いずれ来る冷害に備えてのエネルギーの確保。それがあの戦争の本当の理由。

国会中継を見ながら、足立は上司の池端に質問をする。今日は吹雪が酷く、今日のところは休みとなった。久々の休暇だ。

「これから俺たち、どうなっちまうんでしょうねえ」

まったく意味のないことだと分かっていたが、今の政府を見ていると不安になってしまう。

「さあな。俺に聞くな」

池端は呆気なく流した。政府の命で動いている自衛隊にとって政府の動きは気になるところだ。

「にしても、いつまでこうしてるんだろうな」

池端は外を見ながら、そんなことを溢した。いつもはそんなこと

言わないのに、どうしてしまったのか。足立は、どうしたんです？と聞いてみた。

「もしかしたらな、戦争になるんじゃないかって。このまま冷害が広がれば、いずれは食糧や燃料は底をつく。そうしちまったら、もう奪うしかないんじゃないかって」

そう。日本でも食糧危機に陥るかもしれない。それに両極に近い国家は、海外から買うほかに術はほとんどなく、いつ終わるかも分からないこの冷害に痺れを切らしているだろう。

戦争。それは国家間だけで行われるものではなくなるだろう。世界中でそれは起こる。

第三次世界大戦。それが起こる心配は多くの人によって予想されていた。このまま続けば、いずれ戦争が始まる。そうなれば、日本だって戦わなくてはならなくなる。自分だけ傍観しているわけにはいかない。日本も標的にされるに違いはないし、今大した戦力も持たない日本を落とすのは容易い。

「まさか・・・」

言いかけて足立は止めた。ならないとは、起こらないとは誰にも言えない。なつてはほしくなくても、日本がそうはしなくても世界はそうなるかもしれない。それを否定することはできなかった。

戦争になんてなれば、日本はどうなるのか。

日本の理念。それを守れば国は滅び、守らなければ今まで積み上げてきたものが一瞬で壊れてしまう。

それにアメリカを含む核保有国が有利になるのは必至で、日本やその他の核を持たない国家はすぐに占領されることだろう。力なきものに勝ち目はない。いくら今から軍備を増強しようとも、遅いだろう。それに平和ボケした日本人には戦争をやるなんてことできないだろう。

いくら起こったとしても、まるで人事のような反応が返ってくるに違いない。私たちには関係ないとも言いたげに。

銃も撃つたことがない足立にとって、戦争なんてものは遠い存在

だった。自衛隊に入ってからそんな事態にはならないと思い、入隊した。と言うより、銃なんて握りたくはないし、撃つたりなんて以ての外だ。そんなことのために自衛隊に入ったわけではない。

足立はそう心で思っではいるが、状況が状況なだけに軽率なことは言えない。

冷害なんて言っているが、これは氷河期への前触れだと言う科学者が多い。いや、ほとんどがそう言っている。これから世界はもっと寒くなり、日本も近々氷床に覆われるだろうと。海流は完全に止まり、極寒の大地に変わるだろうと。

「そうなのは、ほしくないですね」

呟くようにそう言った。その言葉に偽りはなく、本心だ。人に向けて銃は撃ちたくないし、そもそも銃なんて向けたくはない。足立は池端を見るが、池端は俯いたままじっとしていた。

この日も雪がよく降り、外はとても寒そうだ。足立は窓の外を眺めた。

和は休校であるにも関わらず、学校にいた。職員室の席に腰を下ろし、机に向かっていた。ため息をつく。

吹雪の中、足を運んだが誰もいなかった。中学校近くのアパートを借りている和は、歩いて十数分で学校に行ける。今日は吹雪の中、身を挺して学校に来た。小テストの採点を行うためだ。

三年生は三月に公立高校の受験が待っている。それに向けて小テストや模試を行っている。和も小テストを作り、少しでも力になるうとこうして頑張っている。

最後の答案の採点を終え、一息つこうとコーヒを淹れた。口いっぱいに苦みが広がる。砂糖やミルクは入れなかった。そういう気分だった。

椅子に深くもたれる。椅子が軋み、和は体を起こした。

あの人は今日何をしてるんだろう？今日も除雪作業を頑張ってるのだろうか。

はたと我に返った。一体何を考えていたのだろうか。どうしてあの人のことが。少し優しくしてもらっただけで、どうしてあの人のことなんて想っているのか。

一気に残ったコーヒーを飲み干す。

「大体あの軽そうな口調が嫌なのに。いつも臭いことばかり言ってくるし。恰好つけたがるし。別に恰好よくはないのに・・・」

誰もいない職員室の中でそんなことを口走っていた。誰も聞いていなかったから良いものを、もし聞かれたらどうしよう。愚痴を言っているが、まるで好きな相手をわざとけなしているみたいだ。嫌よ嫌よも好きのうち。

つくづく馬鹿だと嘆いた。そこに突然扉が開いた。

「おお、何だ。声がすると思ったら、和じゃんか。何してんの？今日は休みだぜ」

唐突に開いた扉に足立が顔を出した。心臓の鼓動が跳ね上がった。思わず、変な悲鳴を上げてしまった。

「ひやって、なんて声上げてんの？もしかしてビックリさせた？ごめん、ごめん」

足立は謝りながら、散ったプリントを拾った。どうやら立ちあがった拍子に、プリントが机から落ちたみたいだ。和は赤くなった顔を隠しながら、プリントを拾った。

神出鬼没。足立はいつもタイミングが悪い。足立は拾ったプリントを和に渡す。和は眼を背けながらそれを受け取った。それが失礼であることは重々承知だが、赤面した顔を正面から見られると、余計に恥ずかしかった。

「ありがとうございます」

ぶっきら棒に礼を言う。足立は、どういたしまして、と返した。少しの沈黙。和はプリントを机に戻しながら言う。

「さっきの質問ですけど。小テストの採点があったので、学校に来

ました」

足立は一瞬止まったが、すぐに思い出したように手を打った。

「ああ、何してる？の答えね。テストの採点か。先生は大変だねえ」
まるで人事のように言っている。実際、人事なのだが、そうと分かっている和は頭にきてしまった。

「ええ、大変です。こんな吹雪の中来なくちゃいけませんから」
突き放したような態度で和は椅子に座った。足立はどうして怒っているのか分からず、動揺してしまう。少し考え、職員室を出ていった。

和はその姿を追いながら、少し後悔した。もしかして、見放されたか。

一人寂しくテストの採点とは、疲れも孤独感も増す一方。そこにたまたま来てくれた足立を追いだす形になってしまったからだ。

再び椅子に深くかけた。今日のうちに他のこともやっけてしまおう。和は次の授業の資料作りを始めた。

担当教科である数学の問題を作る。これは授業中に行う小問題だ。教科書から問題を索引し、似たような問題を作っていく。

数問考えたところで、再び扉が開いた。足立が入ってくる。カップを片手に、和に歩み寄っていく。

「はい、どうぞ」

足立はカップを和に差し出した。それを和は受け取る。コーヒーだ。

「これ・・・」

「まあ、飲んでみ」

足立はさあさあと飲むように勧める。和は恐る恐る口を付ける。
「おいしい」

思わずそう溢していた。本当においしい。和は目を丸くして、二口三口と飲んでいった。

一体何が入っているのか。ミルクと砂糖はたぶん入っている。だが、それとは別に何か入っていることは分かった。でもそれが何な

のか分からなかった。香りが以前のものとは違う。

「一体何を入れたんですか？」

足立は笑顔でこう答えた。

「秘密」

その子供みtainな馬鹿みたいに明るくて無垢で屈託のない笑顔は、和には輝いて見えた。眩しく見えた。

「もう。教えてくださいよ」

じゃれるように話す二人。二人は笑い、会話を弾ませる。

やっぱり私は。

和は確かに芽生えた心に、気付いてしまった。

慧は窓の外を眺めていた。止まない雪。白く綺麗な雪がこんなにも邪魔だとは思ったことはなかった。

二日間病欠し、今日も休校で休み。事実上、三日休んだことになってしまった。それは仕方がないことと言えばそうだし、それはどうしようもないことだ。

いつも悪い夢を見て、朝いつも寒さで目が覚める。そうして一日が始まり、今日もまた同じように始まっていた。

雫は高校受験に向け、自室で勉強中。それなりに頭が良い雫はそこまで必死にならなくても、同じ高校には入れるだろう。高校は市内へバスで十分くらいのところであり、然程遠くはない。冬場はバスを利用し、雪がないときは自転車で高校に通っている。

自転車で風を切る感触はなんとも気持ちの良いものだ。自転車なら三〇分程度だ。

時計は一〇時過ぎ。丁度息抜きには良い時間かと、お茶を雫の部屋に運ぶことにした。慧は急須に茶っ葉を入れ、ポットのお湯を注ぐ。それをお盆に乗せ、湯呑と共に持って上がる。

コンコンと扉をノックして部屋に入った。雫は電気を付け、机に

向かっていた。

「休憩しない？お茶、持ってきたから」

青のテーブルに盆を置く。勉強机から離れ、テーブルのあるカーペットに腰を下ろした。慧は茶を淹れ、雫に差し出す。

「ありがとう」

雫は礼を言つと、温かい茶に口を付けた。体が温まる。体温の上昇を体感する。慧も茶を飲み、冷えた体を温めた。いつも使わない部屋はエアコンを切っているため、こうした休みの日は、自室にいるかリビングにすることが多いため、他の部屋は切つてある。

今日はリビングも大して使わないので、使うときだけ付けるようにしていた。だから、今は切つてあり、慧は底冷えしていた。

雫も部屋自体は暖めているが、壁や窓から冷気が伝わり、少し部屋は寒かった。何枚か着こんではいたが、顔や手は隠すことが出来ず、冷たくなっていた。湯呑が温かくて、手の感覚が戻ってくる。顔にも当てて温めた。

慧はちらりと机の上のノートを見た。苦手な社会の勉強をしていたようだ。暗記科目は比較的苦手で、数学や国語は得意だ。英語はまずまずで、理科も特には大丈夫だ。強いて言うなら社会、特に歴史で、雫は苦手科目の克服に時間を費やしていた。

テストの点などを見ると、特に得意不得意はなく、バランスよく点を取っている。慧から見れば、何をそんなに張り詰める必要があるのかと思ってしまう。

昨日から受験勉強をすると、遅くまで勉強していた。朝も慧より早く起き、机に向かっていた。

一体何が雫を変えてしまったのか。慧には見当もつかなかった。以前から負けず嫌いなところはあったが、ここまで露骨ではなかった。あくまでも人並みだったと記憶している。

何はともあれ、勉強することはいいいことなので、口は出さないでおこう。

慧は盆をキッチンに戻し、自室で読書をすることにした。この二

日で三冊程読み終えてしまい、あまり読むものがなくなりつつあった。

「早く買いに行きたいなあ」

カーテンをめくり、外を見る。まだ雪が降っていた。

しばらく読書にふけり、気がつくとお昼を過ぎていた。もう一時だ。雫は何も言ってこず、たぶん勉強をしているのだろう。本は読み終えてしまい、部屋にあるものはすべて読んでしまった。

はあとため息をつく。お腹は然程空いてはいない。ベッドにごろりと寝転んだ。

飽きた。さつき読んでいた本は一度もう読んでいた。内容は覚えていたし、先も見えていたので、初見の感動はなく、ただ暇つぶしに読んだにすぎなかった。

下に降りて昼食を作る。コロッケを揚げて、皿に盛り付けた。雫の分はラップをして置いておく。それとメモ書きを残して、家を出た。

「う、さむ」

雪はまだ降っていた。風が吹き、顔に直接降りつけてくる。ジーパンにセーター。ジャケットを羽織って、上着だけで六枚。それでも寒さを感じた。ネックウォーマーにニット帽。靴はハイカットを履き、靴下は二枚重ね。

完全装備のようだが、歩いて三十分以上。本屋までの道のりは陰しい。吹雪く中、一步一步進んでいった。

それでようやく目的地に到着する。こんなに遠かったかな、と思うくらい時間がかかってしまった。腕時計で時間を確認すると、丁度一時間が経っていた。

本屋とは言っても、ショッピングモールの中にある。ジュイスは全国各地にあり、地方を中心に展開している。この悪天候でもジュイスは開いていた。肩や頭に積もった雪を払いのけ、中に入っていく。

中は暖房が利いていて、暖かった。歩いてきた慧の体は冷えて

いて、生き返る心地がした。帽子とネックウォーマーを取る。

慧は中をブラブラ歩いた。所々シャッターが下りていて、やっていない店もあるようだ。客は少なく、凄然としていた。幸運にも本屋は開いていて、慧は中に入ってしまった。

文庫本と新刊のコーナーを行ったり来たり。どれを買おうか迷っていた。背負ってきたリュックを開け、財布を出した。財布には五千円札が一枚。買えないことはない。

よしと意気込んで、新書を一冊手に取った。ハードカバーで分厚い。それをレジまで持っていき、会計を済ませる。

ふうと息を吐いた。これでようやく楽しみを手に入れた。安堵の表情で買った本を鞆に仕舞った。モール内を再び練り歩き、一時間ほどで一周出来た。神戸や福知山のものに比べるとそれほど広くはない。あれを回ろうと思えば、二時間や三時間はかかってしまう。

特に買うものも無かったので、慧はジュイスを後にした。

帰日も想像通りの寒さと視界の悪さに手間取り、帰るのに一時間もかかっていた。足場が悪いせいもあり、少し回り道したりもしたが、行きで大体の道や状況は分かっていたので、行きよりかは割と楽だった。

自宅に着き、雪を払って家に入った。丁度日が落ちる頃合いだったので、街灯も付いていた。しかし、雪の影響で大した役には立たず、急ぎ足でここまで辿りついた。リビングには電気が灯っていた。雫が降りてきているようだ。

「ただいま」

玄関で靴とジャケット、帽子を脱いで上がる。靴は端っこに寄せ、ジャケットは何回か振って、雪を落とす。

リビングへと入った慧の前に、雫が立ちはだかった。慧の眼をじっと見つめ、その場を動かうとはしない。

いったいどこに行っていたのか。どうして声をかけなかったのか。どうしてこんな天気の中、外に出たのか。そんなことを言いたげなその目に慧は負けた。

「ごめん。黙っていなくなつて」

俯きながら、反省する。慧はその場で立つたまま、目を伏せた。たぶん本当に怒っているんだな。殴られても仕方がない。そう覚悟した慧に雫は勢いよく抱きついた。

痛いほどきつく抱きつく雫に慧は驚いた。どうして。そう言いそうになつて、その答えを思い出した。以前にもこんなことがあつた。一人にしないで。

そう言つた雫の顔は、今にも涙が溢れそうだった。いや、僕を見た途端泣きだしてしまつた。

雫は泣いていた。声を殺して。慧はその時、雫の本当の気持ちに気付き、そつと抱き締めた。

「ごめん。本当にごめん」

悔いるように、祈るように、耳元で謝り続けた。ただ、ごめん、と。

その夜、二人は同じベッドの上にいた。

もうどこにも行かない。そう誓つた慧は、今日の反省を込めて雫のわがママを一つ聞くと約束した。

「今日、一緒に寝てほしい」

目を赤くしながら、雫はそう言つた。言つてから赤面し、顔を押しさえていた。釣られて慧も顔を赤くしていた。

今に思うと兄妹と言うよりも、むしろ恋人に近かつた。それもまだお互い純粹で照れ隠しながらの。そんな不器用な関係。

二人は同じ枕に頭を置き、同じ布団をかぶつた。雫が手を握る。最初は触れただけかと思つたが、手繰り寄せるように手を取つた。慧もその小さな手をそつと握る。互いの指を絡ませ、しっかりと握りあつた。

もう、離さない。お互いがそう言っているかのように、固く結んだ手。

知らないうちに夢の中へと落ちていった。

春の訪れは未だなく、雪も道路に残ったままだ。三月中旬。卒業式シーズンで、ここ氷上中学校も卒業式を迎えていた。卒業生にとつては、二日後に公立高校学力調査があり、その出来によって進学が左右される。ようはセンター試験のようなものだ。これに失敗すれば、自分の思う進路には行けない。

三月に入ったというのに、気温は平年の二月並みの寒さらしい。冷害から一向に冬期が長くなっている。このまま行けば、三年後には桜は六月か七月に咲くいてしまうのではと言う心配がなされている。

試験の心配はさて置き、卒業式ではやっぱり泣いてしまう人も出てくる。優香もそのうちの一人で、終わる頃には、目を真っ赤にしていた。

もてる男子生徒は、女子からブレザーにボタンをせがまれている。これは卒業式によく見る光景だ。この日に告白する人までいる。人生最後の日。もう会えないならと思いきった行動に出るのだ。

雫は卒業式に来てくれた慧の側に駆け寄っていった。多くの男子が注目する中、慧の腕に抱きついた。

「おめでとう」

誰よりも早く、その言葉を雫にかけてやる。雫は満面の笑みで、ありがとう、と答えた。

晴れてはいるが風は冷たく、道の端々に雪が残っていた。まだ解けていない。

そこに、一人の男子が思い切って、雫に話しかけてきた。

「あ、あの。山埜さん。ちょっと話があるんだけど」

顔を赤くしながら、雫の方を見ている。視線はきよきよと定まらず、挙動不審気味だ。どうやら緊張しているみたいで、これから愛の告白といったところだろう。

「雫。じゃあ、また後でね」

慧は腕を解いて、立ち去っていった。気を使い、その場から去る。雫は慧の背中を目で追いながら、男子生徒の方に寄っていった。

「あれ、誰？」

そんなことを聞いてきた。本当に言いたいのは、そんなことじゃないでしょう。そう雫は心の中で愚痴を溢す。

「兄です」

無表情でそう返した。男子生徒はほっとしたのか、安堵の表情を浮かべた。

「前から、山埜さんのことが好きでした。だから、付き合ってほしい」

お辞儀をしながら言った。とても在り来たりなセリフ。好きな人から言われればぐっと来たりするのだろうが、雫には迷惑の他に何もなかった。

「ごめんなさい」

そう即答した。返事を聞くなり、男子生徒はうなだれてしまった。ああ、面倒くさい。雫はそう思いながらも口には出さず、その男子生徒が顔を上げるのを待った。

しばらくして顔を上げた男子生徒の目は、濡れていた。号泣程ではないが、充血した目が痛々しい。

何も泣くことは。そう思った雫は、余計に面倒だと思ってしまった。泣くことなんてない。別に死んでしまったわけでもないし、二度と会えないわけでもない。高校が違えば可能性は低くなるが、街でばったりなんて無いとは言えない。

雫はその涙の意味が分からず、どうしていいのかも分からなかった。ただ待つことしか。気まずい。そうと思えず、耐えきれなくなりその場を去ろうとする。背中を向け、歩き始めた。その時、声がかかった。

「ありがとう。さようなら」

男子生徒は皮肉か感謝なのかそんな言葉で、別れを告げた。またどこかで会つかもしれない。でももし会ったとしても、他人のふり

をするだろう。

雫は教室に戻る途中、何度か呼び止められたが、用があるから、と全て振り切った。

教室でさっさと荷物をまとめて校舎から足早に出ていった。一度だけ振りかえる。

もうこの校舎ともお別れか。そう思うと少し切ない。

校門に向かった雫の目には、そこで佇んでいる少年の姿を見つけた。兄だ。

「慧」

そう控えめに呼ぶと、それだけで気がついてくれた。雪がない道路を歩き、自宅に向かった。慧が今日はお祝いをしてくれるのだから。ささやかながら、今日はふんばつすると言っていた。

雫は家路を軽快に歩いた。

「あの子も卒業か。高校に行っても大丈夫だろうか」

和は卒業生を送り出しながら、雫の背を追っていた。それにさっきの男の子。高校の制服着てたけど。

和にとって雫の存在はすごく気懸りで、心配だった。でも、二人の姿を見るとそんな気持ちも少しは和らいだ。

あんな顔もするんだ。新たな発見に心躍らせ、和は彼女から目を逸らした。そして思う。

桜が咲くのはいつになるんだろう。

それでも春や夏は訪れて、

公立高校学力試験が終わり、願書の提出が始まった。試験の出来で希望校を選択する。雫はもちろん慧と同じ高校だ。それは以前と変わらない。優香も同じ高校に進学すると聞いて、少しは安心感が出た。

知らない人より、知っている人がいた方が断然良い。

願書の提出をし、学校の帰り優香が家に寄った。

「上がった、上がった」

以前家に来てから関係は良好になり、小学校の頃に戻ったようだった。雫は手招きし、優香を家に上げた。家の中は綺麗に片付いていて、埃ひとつない感じた。

雫は少し考え方を変えた。それは、ごく最近だ。卒業式の時。

優香はいつも雫を気遣っていた。それに下心はなく、純粹に雫を心配してのことだった。それなのに雫はいつも優香を突っぱね、近づけまいとしていた。

事故以来、優香はいつも雫のことを目にかけていた。まるで親の如く。何かあれば、雫の側に駆け寄り、手を貸してくれた。クラスで虐められていた時も、自分のことのように怒ってくれた。

どうしてと思うことは多々あったが、気遣ってくれていることは気付いていた。

優香はいつも自分の代わりに泣いてくれる。事故の時も。卒業式の時も。

泣けない。泣いてはいけなそうと思ひこむ雫の前でいつも泣いていた。

事故直後は泣けなかった。自分のことを疫病神扱いする声を聞き、泣けなくなった。泣いても両親は返ってこない。それにお前には泣く資格がないとも言われているかのようなだった。

本当の子でもない、赤の他人が。泣いてはいけなそう。でも、泣き

たい。

それに慧はぐつと耐えていたから。だから、泣くわけにはいかなかった。

その時だった。優香の姿が目に入った。自分のことでもないのに、優香は泣いていた。他の誰よりも激しく脆いその泣いていた。

それに釣られて涙があふれ出した。前が見えない程に流れる涙は、拭っても拭っても流れ続けた。嗚咽が漏れる。ううと声が出た。

優香はソファーに腰を下ろした。

「待ってて。お茶淹れるから」

そう言ってキッチンに向かった。お茶の一つくらいは淹れられるようになった。紅茶の葉とお湯をフレンチプレスに入れ、蒸らす。色が出てきたところで、弁を押し下げ茶葉を抑えつけながら、カップに注ぐ。ソーサーと共に盆で運ぶ。

はい、と渡して、優香は香りを嗅いだ。

「うん、良い香り」

ご満悦の様子で、砂糖を入れて飲む。雫は熱したミルクを砂糖と共に紅茶に入れた。

自分でもお子様のようだが、これが一番おいしい。

体が温まる。三月終わりと言えども、気温は平年の二月にあたり、まだまだ寒い。桜は五月頃になるだろう。

慧は高校が休みで、今日も自室で読書だろう。暇さえあれば本を読んでいる。それ故に博識で、最近の情勢にまで詳しい。一体いつ知るのがかと思うが、見ているテレビはニュースばかりだ。バラエティ番組はほとんど見ない。でも、流行の音楽や衣服も知っている。それに料理や掃除、裁縫も出来て、雫には手放せない存在となってしまうた。

それにスポーツも出来る。顔は悪くない。成績も優秀。優しくて気が利く。

完璧超人。その一言で済ませてしまえる。そんな人間だ。

だから、誰が好きになろうとおかしくはなかった。それが身近な

人間ならなおのこと。別に優香ならと思ってしまうこともあるが、雫にだって引き下がれない。

だって一番近くで、一番長く、一番慧のことを知っている。だから、譲る気なんてないし、取られるとも思わない。だっていつも見てくれているから。一番大事にされてきたから。

そんな気持ちは優香も同じで、雫にだけは負けたくないと思っていた。

いつも一番近くにいて、ずるいと思っていた。でも、雫を嫌うことなんて出来ずにいた。そんな自分が嫌いで、堪らなくずるいと思った。雫は好きだけど、慧のことも好き。もし、結ばれれば、誰が一番悲しむか分かっているのに、雫を構っている自分がいて。

そんないつも葛藤に悩まされ、それでも自然と雫のことが気になって、放ってはおけなくて。だから、ずるいと思った。

慧と結ばれたいけど、雫とも仲良くいたい。欲張りで困ってしまった。

「高校、受かるといいね」

そう雫は呟いた。特に嫌味はないが、成績が乏しくない優香にはプレッシャーに感じてしまう。

「私立合格してるから、落ちても浪人だけは免れる。雫は一本でしよ？」

「うん、公立一本」

雫は私立の所謂滑り止めは受けず、公立高校一本に絞った受験だった。それでも成績の良い雫は、担任からそれでもいいと言われ、慧も容認した。

まだ決まっではないが、テストの自己採点では大丈夫と二人とも言われた。もちろん担任からだから、蓋を開けないことには分からないのだが。

「もし落ちてたら、バイトしながら通信制の高校に通うつもり。慧もそれでいいって言ってくれたし」

ミルクティーを飲み終え、カップを置く。

優香は再び笑顔で言った。

「受かってるといいね」

その言葉は現実となった。発表当日に慧と雫、優香の三人で高校まで足を運んだ。当然、合格発表を確かめるためだ。

「・・・あった」

優香は張り出された番号を目で追っていき、途中で目を停めてそう言った。それから、あったあった、と騒ぎだす。優香だけでなく、周りの受験者も感激していた。

優香ははつと我に返り、雫の隣に駆け寄った。

「どうだった？」

恐る恐る聞いてみた。雫の表情はあっけらかんとしていた。隣の慧は表情を緩め、ほほ笑んでいた。雫の受験票を覗いて、雫の番号を探した。番号は雫の視線の先にあった。

「あるじゃん。ちゃんとあるよ、雫」

肩を持つ。雫は優香の顔を見て、ひらりと涙を見せた。そのまま涙は流れに流れ、決壊した。

「うわあ。ちよつと雫。何泣いてんの」

優香は動揺して、雫の涙を指で払う。雫は、よかった、よかった、と呟いていた。それほど嬉しかった合格。これで慧と同じ高校に通える。そう思っただけで、自然と涙が出てきた。

張り詰めてたんだな。優香はそんな雫をただ見ていることしかできなかった。でも、雫のこんな姿を見せてくれたことが嬉しかった。不謹慎かも知れない。でも、純粹に嬉しく思っただけだ。

三人で担任の教師のもとに、合格の報告に向かった。高校から出ているバスに乗り、中学横の市役所前で降りた。そのままの勢いで中学校の敷地に足を踏み入れた。

慧にとっては、一年も前に卒業した中学。雫や優香にとってはついさっき卒業したばかりの中学。

各々違った思いを胸に校舎内に入っていた。

「懐かしいなあ」

慧は校舎内をきよろきよろと見渡しながら、職員室に向かう二人の後を追っていた。雫と優香にはそれほど懐かしいとは思えず、よく知った校舎の中をずいずいと進んでいった。

職員室の前に立ち、軽くノックをしてから扉を開けた。

「失礼します」

優香が先陣を切り、一番に入っていく。中を見渡し、担任を見つける。

「小宮先生」

優香は職員室の中心くらいの席に座る、初老の教員に寄って行った。雫もその後を追う。

「おお、伊藤に山埜。合格おめでとう」

優しくほほ笑むその姿は、二人の合格を心から称えていた。優香は照れながら、頬を引っ掻いた。雫も俯いたまま、ありがとうございます、と小さく呟いた。

中学側にはもう合否が届けられていて、中学校でも張り出されていた。

職員室の入り口で二人の様子を見ていた慧は、すっと胸を撫で下ろした。やっと実感が湧いてきた慧は、安堵の表情を浮かべていた。

「あの・・・」

そこに声がかけられた。

「あ、すいません。邪魔でしたか。すぐに退きます」

慧は慌ててその場を飛び退く。

「いえいえ。そうじゃなくて。山埜さんのお兄さん？ですよね。合格おめでとうございます」

声をかけてきたのは、まだ若い女性教員だった。スタイルもよく美人で、その姿に惹かれてしまう。あまりの美人に慧は顔を背け、二人の方に目を泳がした。

「ありがとうございます」

照れ隠しながら言う。ひとしきり話した二人が戻ってきた。

「西口先生。合格しました」

優香はその女性教師を見るなり、合格の報告をした。

「おめでとう」

ほほ笑みながら賛辞を送った。優香も笑顔で返した。雫も優香の後ろで笑っていた。

「山埜さんもおめでとう」

自分の名前を知られているとは思わず、雫はしどろもどろに礼を述べた。

「ありがとうございます」

その言葉を聞いて、さらに笑顔が輝いた。西口和は二人の頭をそつと撫でてやった。

三人は揃って職員室から出た。出たところで呼び止められる。

「ちよつといいかな、山埜さん」

雫は、はいと振り向く。和はしまったとバツが悪そうに言った。

「お兄さんの方なんですけど」

慧は、どうして自分が呼ばれたのか疑問に思いながらも、和の後をついて行った。残された二人は、先に校門で待っていることにした。

「ごめんなさい。呼び止めてしまつて」

俯きながら、和はそう切り出した。いえ、と慧も気まずくなる。

「妹さんのことなんですけど・・・」

和は戸惑いながらも、話を続けた。

「虐められてみたいなの。クラスの男子にからかわれる程度だったけど、いつも暗い顔をして過ごしていたわ」

驚愕の事実を突き付けられた。慧は動揺するが、何とか冷静を装う。

「聞いた話では、兄との禁断の愛だとか、二人は好きあつてると言つた内容だったけど。そんなことがあつて、クラスみんなとはやきもきしていたみたい。でも、伊藤さんがいたから、何とかなつてはいたけど」

慧には信じられないことだった。

家ではいつも明るく、元気のように振る舞っていた。それが演技で、学校なんて行きたくなかったのではないのだろうか。それを一番近くで見ていたのに、気がつかなかったなんて。馬鹿だ。兄失格だ。

自分を自分で責めた。そんなことをしても、何の解決にもならないことは分かっていたが、そうせずには居られなかった。

微かに震える慧の体を見た和は、しまったと後悔する。後悔したところで、もう後の祭り。

「大丈夫？」

そんな言葉に何の意味があるのか。そうは思いながらも、何か声をかけなければと和は思い、無意味な言葉をかけた。

「す、すいません。どうしたらいいのか、わからなくて」

何かを必死に堪えながら、慧は地面をじっと見ていた。震えは止まり、肩には力が入っていた。和はぎよっとした。

「怒らないで。怒るなら、私たち教師を怒って」

「そんなんじゃないやありません。ただ」

ぐっと拳を握った。

「ただ、自分に腹が立ってるだけです」

さつきまで優しくかった慧の姿はなく、怒りに埋もれていた。こんなに怒っている慧は想像できず、和は戸惑ってしまった。

自分に腹が立ってるだけです。

その言葉が、和に重く押し掛かった。

「ごめんなさい」

とっさに出た。慧は我に返った。

「あ。すいません。そんなつもりじゃなかったんです。別に先生が悪いわけじゃないんですから」

申し訳なさそうに顔を伏せた。和は再び、ごめんなさい、と呟いた。

「何やってんの」

と、そこに空気を読まない声が割って入った。迷彩服を身に纏い、

短髪で爽やかな印象を受ける男子自衛隊員だ。細く見えて、中身はがっちりしている。

和は落胆する。どうしてこうもタイミングが悪いの。

腹を立てながら、何でもないです、と告げた。それから、慧の方を向きなおした。

「さっきのことは忘れて。と言われても無理よね。だから・・・そう、あまり深くは聞かないで上げてほしいの」

言葉を詰まらせながら、和は言う。慧も過去のことをとやかく言うつもりはまったくない。傷口を開くだけかもしれないし、知られたくないことだってある。誰だって秘密の一つや二つ持っている。

「分かりました。このことは二人だけの秘密で」

そう言って、慧は離れていった。そうこれ以上話すことはないと言わんばかりに。その姿を和は見つめていた。

「誰？」

まったく無視された自衛隊員の足立が、和に聞いた。和は、誰でもいいでしょ、と煙たそうに言い、職員室に戻っていった。

慧は校門に早歩きで向かった。二人は門にもたれ、慧のことを待っていた。

「先に帰っててもよかったのに・・・」

慧はとっさに目を逸らした。さっきの今じゃ、顔を合わせずらい。雫はそんな慧を無視して、ずいど寄ってきた。

「何の話だったの？」

少し怒りが籠った声で、迫ってきた。慧は避けるように校門をくぐる。

「早く帰って、今日はお祝いだ」

話を反らしてみる。雫はむっとしたが、すぐに表情が和らいだ。

「ごちそう、楽しみにしてるから」

笑顔には、さっきのことは追及しないからその代わり、と脅迫されているようだった。飯で引いてくれるならと、慧は笑顔で答えた。「任せという」

その夜は、とても冷え込んだ。四月頭で、今日は高校の入学式だった。それでも晴天に恵まれ、入学を歓迎しているようだった。

今まさに体育館で入学式が行われている最中で、在校生の慧も式に参加していた。教員の許可をもらい、客席でカメラを構えていた。式開始から丁度一時間ほどで閉会し、続いて入学説明会に移った。在校生は各教室に戻り、ホームルームと清掃後に体育館の後片付けだ。慧は保護者として雫の隣に座った。説明が始まった。

二人は配られた資料を見ながら、話を聞いた。内容は教科書の販売のことや授業に関することなどだ。雫は少々退屈気味だが、慧はその説明を真剣に聞いている。

それも一時間ほどで終了し、新生は担任に連れられて教室に向かった。慧も自分の教室に向かう。教室に入ると、思いもしないことが起こった。

「お、委員長。お帰り」

「委員長。ご苦労さん」

はて、何のことやら。慧を見たクラスメイトは、慧を委員長と呼んだ。黒板に目をやる。

「はあ？何で・・・」

白いチョークで委員長の下に、山禁、と書いてあった。

「みんなの推薦」

からかうようにクラスメイトの一人が言う。何とも理不尽な決定だ。本人のいないところで勝手に推薦し、勝手に決定していたのだ。「ちよつと待ってくれよ。勝手に決めないでよ」

慧は必死に訴えかけた。だが、もう決まったことだと降ろしてはくれなかった。

「たく、何で勝手に決めるかな・・・」

慧は愚痴を溢しながら、席に着いた。慧の後部の席に座る男子生

徒が話しかけてきた。

「保護者は大変だね。でもまあいいじゃんか。一年の時もやってたんだから」

人事のように言つてのけるこの生徒は、慧の友人の友沢彰信だ。中学の時は生徒会長を務めていた。人懐っこい性格で人望も人気もあつた。野球部に入部し、高校でも続けていた。

「・・・あの」

隣に座る女子生徒が声をかけた。慧は横を向いた。そこに座るのは、髪の長い綺麗な子だった。見覚えはある。高校でも屈指の美人と人気の女の子だった。

「副委員長になった芦田沙弥子です。よろしくお願いします」

小さくお辞儀をし、慧も釣られてお辞儀を返した。こちらこそ、と小さく呟く。

慧にとって沙弥子は目を引く存在で、どんな男でも綺麗な女の子が目の前にいれば、緊張の一つや二つ当たり前だ。動揺しない方がおかしい。

沙弥子は見た目だけでなく、立ち振る舞いや言葉遣いなども完璧だ。教師の間でも模範となる生徒の一人と言われている。彰信もその一人で、彰信と一緒にいる慧も模範扱いだ。それは慧にとって悪いことではなく、教師からの信頼もあれば大学の推薦も受けやすい。簡単なホームルームの後、クラス全員で後片付けに向かった。椅子やシートを片づけ、作業が終わると各々は部活やら帰宅やらと別れていった。

ふうと息をつき、慧もシートを運び終えて体育館を出た。彰信も慧の後を歩く。沙弥子も二人に続いた。

「雫ちゃん、同じ高校でよかったな」

彰信は慧の肩をぽんと叩いた。まあね、と慧は頷く。沙弥子には何のことか分からず、尋ねてみる。

「誰ですか？」

「妹。それから、同級生だから、ため口でいいよ」

慧は前を向いたまま答える。言いながら照れていた。どうも同級生に敬語を使われると違和感がある。それを面と向かって言うのはどうも恥ずかしい。

「へえ。妹さんがいるんだ」

待っていたかのように、沙弥子は崩す。それでも少し違和感が慧には感じられたが、これ以上どうしようもなく気にしないでおくことにした。

「うん。今年一年生。僕は保護者代わりだから」

少し尻すばまりになった。沙弥子には言葉の意味が分からず首をひねった。

「どういう意味？」

沙弥子は疑問に思い、聞いた。しかし、それが軽率な行動だったと後悔した。

慧は完全に沈黙し、俯いてしまったのだ。慧自身も口を滑らせてしまったが、沙弥子も痛いところをついてきたのだ。だんまりの慧を無視して、彰信が返答した。

「慧のうちは両親いないから。だから、慧が雫ちゃんの親代わり」

「ちょ、アキ。何勝手に話してんの」

いつもより怒った口調で彰信の肩に掴みかかった。彰信も動揺した様子で、目をまんまるとしている。いつも温厚な慧が怒ることは珍しく、彰信にとってもそれを見たのは初めてだった。

「ごめんなさい」

そう沙弥子は呟いた。詫びるように呟いた声は、慧の耳にはつきり聞こえてきた。

「何で謝るの？悪いのは・・・」

そう言っただけで慧は詰まり、彰信を掴んでいた手を離れた。

「誰も悪くない、ね。ごめん、僕が悪かった」

暗い面持ちでその場を去っていく。二人はその背中を目で追っていた。

「何かあった？」

校門で雫が待っていた。歩いてきた慧の顔を見るなり、心配そうに尋ねた。

「あ、ごめん。そんな顔してた？」

「うん、してた。こんな顔してた」

雫は慧の顔真似をする。かなりオーバーに似ても似つかないような顔だ。それを見た慧はぷつと吹き出した。

「はははは……。そんな変な顔してたんだ。ふふふふ……。」
笑いが込み上げて来て、慧はさっきの顔とは一変して明るくなった。

「よし。帰ろうか」

慧は雫の手を取る。雫の顔は苺のように真っ赤に染まった。

季節は春。段々と暖かくなり、桜の開花が始まっていた。それでも四月終わり。平年に比べると一カ月も遅い。その頃には街から雪が消え、自衛隊員も支部に戻るようになった。

足立たちは大型のトラックに荷物を運び込んでいた。機材や除雪道具まで種類は様々だ。

実家には発つことを伝え、それに関して気懸りはない。まあ、お袋が泣いていたくらいか。

気懸りがあるとすれば、こっちか……。

足立の視線の先には、和の姿があつた。今日伊丹に向けて出発することを教職員全員が知っている。

昼までに作業が終わった足立は、昼食がてら和を連れ出した。その帰り道、足立と和は桜並木の道を歩いていた。土手沿いに植えられた桜は、もうすぐ見頃だろう。

「今日、帰るんだ」

「そう……」

いつもの活力が感じられない。

「実家には伝えたんですか？」

「ん、ああ。お袋は泣いてたけどな。俺が自衛隊に入るの、最後まで反対してたから」

足立はどこか優しい雰囲気になった。母を思っているのか、目はどこか遠い空を見ている。その目はとても優しい。

「いいんですか、こんなところにいて。出発じゃないんですか」

皮肉を言っただけだったが、足立は遠くを見ながら、そうだね、と呟いた。

「ここは、とても良いとこだから。空気はうまいし、自然は多いし。人もみんな優しいし。ずっとここに暮らしたいよ」

じゃ、どうして自衛隊に入ったのか。それは前に聞いていたから、突っ込まずに和は堪えた。

「じゃあ、自衛隊になんて入らなければよかったって思ったでしょ」
嘘と言いたくなるのを和は抑えた。

「でも、ここから離れなければ、こんな気持ちは生まれなかっただろうな・・・」

遠くを見ていた目が和を向いていた。真剣な目つきに変わる。

「こんなことなら、離れなければよかったな。でもそうしたら、俺たちは会ってないんだろうな」

いつの間にか足が止まっていた。足立は再び歩き始めた。前を向いて、視線はしっかりとしていた。さっきどこかを見ていた目ではなく、何かそこにあるものをじっと見据えていた。

「俺は和と会えてよかった。こんなに楽しいと思ったのは初めてだから、離れたくない。ずっとここにいたい」

それは足立が見せた初めての涙だった。頬に一滴の雫が流れた。大切な人と、大好きな街と、離れたくない。その強い思い。

和も同じ気持ちだった。足立のことは最初は、鬱陶しいとかしつこいとか思うこともあった。でも、足立にいつも気遣ってもらって、励ましてもらって、一緒に悩んでくれて。

外見は軽そうで、馬鹿そうで。自分には絶対合わないと思ってい

たのに。優しさに触れるたびに、気持ち傾いて。気がつくともう手遅れで。勝手に好きになっていて。でも、それを認めたくなくて。意地になったりして。

好きになる人はいつも誰か友達が好きだった。よく被って、自分から身を引いたことが多々あった。仲の良かった友人が告白した時、その友人は断られた。

「和のことが好きなんだって」

断った理由を聞いた時、友人に言われた。

「裏切り者。親友だっと思ってたのに」

自分でも親友と思っていた。だから、彼女の恋を応援した。相談にも乗ったし、側で励ましたりもした。

それなのに、裏切り者。裏切りなんてしていない。勝手な思い込みだと思っただけ、口には出せない。もし言えば、それ以上に仲が拗れるから。それにもう仲を取り巻く環境が変わってしまった。

彼女を哀れに思う集団が出来、次第と私を追い詰める。口には出さなくとも、お前が悪いと言ってくる。

どうしようもない。それは友人を作り度、起こった。親しくなれば、その子が思っている人は、自分のことを好きになる。

だから、自分で壁を作った。誰も近寄れないように、いつも高貴に振る舞っていた。傍から見れば、生意気とか気取り。手の付けられそうにない人柄を演じることで、自分に近寄る人間は減った。

教育大学に進んだ時も、そのスタイルは変えなかった。変えようと、またいざこざが起きかねない。大学生にもなつてそんなこと、もうごめんだった。

中学の教師になってからは、少しは和らげた。今までもまだまだとあまりに生徒が取っつき難いだろうと思つて。それに、周りの教員はほとんどが結婚済みだった。

そこに、思いもよらない人物が現れた。自衛隊員のくせに、馬鹿みたいに教師に話しかけてきて、相手のことなんて関係なく一方的に話してくる。

最初は鬱陶しかった。時間を問わず、見つければ必ず声をかけてくる。どんな状況であろうと。いつも軽いノリで。

初めて食事に行った時、相談に乗ってくれた。ただ話を聞いてもらっているだけなのに、知らずと気持ちは楽になっていた。

好きなんだ。そう気付いてから、段々会いにくくなった。どんな顔をして会えばいいのか。どんな話をすればいいのか。

会いたい。でも、会うのは怖い。もし、嫌われたら。もし、面倒な女だと思われたら。もう、会わなくなってしまったら。そう思うと自分からは会いに行けなくなった。

でも、彼は会いに来てくれた。話しかけてくれた。笑顔を見せてくれた。だから、自分も話すし笑う。

相手を思えば思うほど、嫌われたくないと思うもの。現状のままが、一番楽しかった。好きだと言って関係が壊れるくらいなら、ずっとこのままでいたかった。

「私も。私も、離れたくない。ずっと一緒にいたい。ここでこのまま、ずっと」

自然と涙が溢れていた。止まらない涙が頬を伝う。メイクが取れる程に涙を流した。足立は和にハンカチを渡し、泣きやむのをずっと待った。

ひとしきり泣いた和の目は真っ赤になっていた。ごめんなさい。そう小さく呟くと、頭を小突かれた。

「馬鹿、謝んな。泣きたいときは泣けばいいんだよ。我慢が一番良くない」

そう言っ、和を抱きしめた。包まれる安堵感。和はまた泣いてしまった。

学校まで帰るのに三十分もかかり、三倍もかかった。池端は足立の帰った途端、ごつりと拳骨を頭に振り下ろした。帰ったら、腕立て三百だ。そう言っ、車に乗り込んだ。

「電話するから。だから待ってて。今年の冬に、また戻ってくるから」

足立は笑顔で言つて、車に乗り込んだ。運転席に座る。ミラーで和を見る。まだどこか寂しげだ。車から降りて、もう一度抱きしめてやりたかった。でも、そうしてしまつと、戻れなくなる。そう思った足立は、気持ちとは裏腹に車を発進させた。そうして足立たちは、伊丹に向けて出発した。

「山埜くん、行こう」

沙弥子は慧と共に教室を出た。放課後。今日はクラス委員の集まりがあつた。クラス委員に止まらず、各役員は指定された教室で会議があつた。

学級委員の会議場所は、三年の教室で階段を下つて三年生のフロアに足を踏み入れた。

二年生とは違い、どこか違和感があつた。雰囲気の違いを感じ取つたんだと思う。二人は揃つて教室に入った。もうどのクラスも揃つていて、後は二年三組だけだつた。その三組もすぐに駆けつけ、会議はスタートする。

まず初めに学年代表を決めることとなつた。誰もやりたがらないのは明白で、じゃんけんやくじ引きを始めるだろう。

「僕がやります」

慧は二年生の代表に立候補した。時間が無駄だし、クラス委員も学年代表も大して変わらない。それなら誰がやろうと一緒に、揉めるのも時間も労力も無駄だ。

二年生の代表は一瞬で決まり、三年と一年はまだ話し合い中。案の定、くじじゃんけんを採用し、代表を決め始めた。

会議はそれだけで終了し、解散となつた。にしても、無駄な時間だ。ただ、このためだけに時間を割いて集まつたのだから。各代表には一枚のプリントが渡された。

それは役員の名簿表だつた。各クラスの委員長、副委員長の氏名

とクラスを記入する。そんなもの、今日回しておけば良いものを、忘れていたらしい。

二人は教室に残り、表を埋めていく。

「一組は斎藤と稲森さん。二組は・・・」

「後藤さんと原さん。三組は井上さんと矢代さんで、四組は足立翔司さんと足立佳奈ちゃん。五組は山埜さんと私で、六組は藤本さんと筒井さん」

沙弥子はすらすらと各クラスの委員たちを言う。

「すごいね。もう覚えたの？」

「うん。名前は知っている人ばかりだったから」

二期連続でクラス委員をやらされるのは多々あり、沙弥子もその内の一人だ。慧も知っているからと押し付けられるのが多い。なんとも無責任な。

「私、一年の時にクラス委員やってたから」

につと苦笑いをする。慧は、そう、と答えた。知っていたが知らなかったふりをする。

慧もやってはいたが、全員のフルネームなんて覚えてはいない。

名前を書き終え、職員室に提出して下校する。慧と沙弥子は下駄箱を出て、駐輪場に向かった。慧は自転車で沙弥子は電車通いだ。駅まで送ることになった。

駅までの十数分。自転車を押しながら、話をしていた。

「沙弥子ちゃんは春日中だよね？」

芦田の苗字が複数いることから名前で呼ぶことが多いが、考えた挙げ句、一番無難なものを選択する。

「うん。慧くんは氷上だよ。真由美から聞いた」

「最近まで自衛隊が駐屯してた。一週間前に引き上げたらしいよ」
自衛隊が引き上げたのは丁度一週間前だった。ゴールデンウィークの前だったろうか。よく地域に貢献してくれたと思っている。

へえと沙弥子は肩にかけた鞆をかけ直した。商店街の中心を進む。いつの間にか、慧と呼ばれていた。以前なら嫌がっていたが、今は

割と好きだった。

昨日のテレビの話とかドラマの話とか。そんな在り来たりな話題で、駅までの道を歩いた。

「ありがとう、送ってくれて」

「ううん。気をつけてね」

お互いバイバイと手を振り別れた。慧は自転車に乗って駅を去る。沙弥子は駅のホームに進んでいった。

沙弥子は駅員に定期切符を見せ、線路を跨いだ向かいのホームに行く。そこにあるベンチに腰掛けた。ふうと息をつく。鞆を膝の上に置いて、鞆から文庫本を出して読み始めた。

そうしていると高ぶった気持ちが落ち着いていった。最近読むのは恋愛小説で、ヒロインの気持ちに身を投じている。

いつの間にか世界に入り込んでしまい、泣いたり笑ったりしてしまう。

そういえば、慧くんも本好きらしいな。

真由美から聞いたその情報はかなり正確で、慧のを知ることができた。真由美は高校からの友人で、一年でかなり仲良くなり、今では恋のサポートをしてもらっていた。

「山埜くんのが知りたい」

いつも何気ない、誰も気がつかないような仕事をやっていた。誰から言われるでもなく、雑用をこなす姿。いつもクラスに馴染んでいて、でもそこからは一歩引いた位置から見ていた。

大人びた人。それが第一印象。それから、慧を知っていくうちに好きになっていた。

大人びた。それは見方を変えれば、冷めた人になる。でも、それとは違う。そのみんなを見る目は優しくかったのだ。彼を見るたびに、気持ちは大きくなっていった。

真由美に慧の中学時代のことを聞いていくうちに、もっと好きになっていった。料理が出来て、裁縫が出来て。運動もそこそこ。勉強はかなり。

聞けば聞くほど、慧の完璧さに驚いた。

「サーヤなら大丈夫だって。思い切って告白してみたら」

そんなことを真由美は言うけれど、見ず知らずの人からの告白を受けるだろうか。何せ話したことは一度もなかったからだ。

そうこうしているうちに一年が終わり、二年生になった。クラス分け。まさかと思った。

慧と同じクラス。思わず、二度も見えてしまった。真由美とは離れたが、よかったね、と言ってくれた。

電車が着いて、乗り込む。さすが田舎の路線。乗客は少なく、難なく空席を見つけて座る。読書の再開。

二駅目で降りた。そこから徒歩で十分以内。そこに沙弥子の自宅があった。鞆から鍵を出し、家の中に入って行った。自室に入り、鞆を机に置く。

「疲れたー」

制服のままベッドに倒れ込んだ。しわになるが、気にしない。ごろりと反転し、仰向けになった。天井を向く。

「慧くんは今頃どうしてるかな・・・」

まだアドレスや番号は聞いていない。自分から教えてとは言いにかった。同性なら簡単なのに。そう思っポケットから携帯を出した。

「さすがにアドレスは知ってないよね・・・」

それでもと思い、真由美にメールした。送信してすぐに返信が来る。

「これ、山埜慧のアドレスね」

そう書かれた下にアドレスが書いてあった。そしてその下には、ガンバレと書かれていた。ありがとう。そう返信した。

それから携帯とにらみ合いが始まった。

メールを送ろうか。やめようか。送りたい。でも突然は迷惑か。もし変に思われたらどうしよう。返ってこなかったら。

そんな葛藤の末、送ることを決意した。

「送信つと」

内容は、芦田沙弥子です。真由美から聞きました。登録よろしく
願います。

当たり障りのない、平凡な内容。携帯を枕元に置いた。

それからまた携帯とのにらみ合いが始まった。食事に呼ばれ一階
に降り、終えるとすぐに自室に直行。携帯を確認。風呂に行つて上
がれば、すぐに自室に行き携帯を確認。

確認する度に、まだかため息。それは午後九時まで続いた。今
日はたぶん返つてこないだろう。たぶん、登録だけして返信を忘れ
たんだ。

自分に良いように解釈する。そうしないと、不安で眠れなさそう
だった。九時半を周り、もう完全に諦めていた。そこに聞きなれた
着信音が流れてくる。ベッドにひれ伏していた体をがばつと起こし
て、携帯を手にとった。正座だ。

姿勢を正し、読み上げた。

「返信遅くなってごめん。登録しました。明日も学校だけど、頑張
ろっね」

心のそこから謂われない喜びが込み上げてきた。もう一度見直す。
「ありがとう。明日も元気に頑張ろっね。突然メールしてごめんな
さい。また明日。おやすみなさい。つと」

声に出しながらメールを打った。送信し、返事はすぐに返つてき
た。

気にしてないよ。また明日、学校で。おやすみ。

友達同士でやるようなメールのやり取り。それでも沙弥子にとつ
ては大きな一歩だった。今まで話すら出来なかったのに、一カ月で
アドレスまで手に入れた。

携帯を閉じて机の上に。今日はもう寝よう。そう思い、電気を消
して布団の中に。気持ちの高揚が落ち着くまで、じっと目を閉じて
いた。

眠りに落ちるまで、慧のことが頭から離れなかった。

なんやかんやと時間が過ぎて、季節は梅雨を通り越して夏。夏と言つても、然程気温は上がらない。過ごしやすいと言えばそうなのだが、あの暑さが好きな人にとっては面白くないだろう。それに海水浴も年々客が減っている。

そんな中、夏祭りは未だに根強く生き残っていた。祭りは今でも熱い。盆と時を同じくして行われる祭りは、旧町を挙げての行事だ。氷上中学校を中心に毎年行われる。県外からも多く人が集まり、その目当ては花火だ。

毎年約四千発の花火が打ち上げられ、その歴史は大正時代から続いていた。

夏休みの最中ということもあり、人は多い。夏休みは冬に比べると減っているが、それでも盆時期に休みになるよう、八月から九月まで休みだ。そのため、夏休みの宿題が少ない。

「今年も祭り行くでしょ？」

自宅からすぐの祭りに毎年参加していた慧たち。雫は慧にそう聞いた。

「行くよ」

「じゃあ、一緒に行こう」

屈託のない笑顔で嬉しそうに笑った。慧はバツが悪そうに顔を背けた。

「ごめん。今年は別の人と回るから」

えっと雫は思わず溢してしまった。今まで一緒に毎年出かけた祭り。今年も一緒に行けると思っていた。

「そ、そうなんだ。じゃ私は優香と回るね」

「・・・ごめん」

気まずそうに自室に戻って行った慧を横目に、雫は少し泣きそうになっていた。

「優香―」

そう言って優香に泣きついた。あせった様子で雫を抱きとめた。

「ど、どうしたの、雫。何泣いてんの」

「慧がね、今年は一緒に回れないって。他の人と回るからって」

そう、と優香も残念そうに頷いた。優香自身も今年は一緒に回るかもとわくわくしていた。

「たぶんクラスの友達だって。友沢さんだって、きっと」

慧と友沢彰信とは仲が非常によく、生徒会長をしていたこともあって、その時期にいた生徒で知らない人はいないだろう。

「じゃあ、他の人なんて言わないよう。友沢さんのことは、アキって呼んでるもん」

「じゃあ、男友達じゃない。きっとそうだって」

確かに今まで女の子にもてた様子がない慧。少し失礼だが、あまり恰好よくはない。彰信といるときは、彰信の引き立て役みたいになっていた。それを悪く思う慧ではないが。

だとしても、慧は告白された試しが一度もなく、恋仲になったという噂も立たなかった。火がないところに煙は立たぬ。その通りだ。
「・・・確かめよう」

雫は顔をあげた。優香の顔をじつと見つめた。

「もしかして、後を付けるの？」

「その通り。尾行して、相手が誰なのか確かめる」

優香としても相手が誰なのか知りたい気持ちがあった。そんなことはしたくなかった。でも。

「うん。私も」

好きな人のことは知りたい。それに雫に後れを取るわけにはいかない。ただでさえ普段からあまり会えないのに、これ以上雫だけに秘密を持たせなくなかった。それに最悪、慧の相手が女子だとすれば、知っていれば対策もしやすい。どんな対策をするのかはさて置き。

「入って」

雫の手を引き、家の中に。とりあえずは戦闘服に。そう思い、自室に雫を連れ込み、着替えに移った。

「目には目を。祭りと言えは浴衣。だから浴衣の中には浴衣でいれば、分らない」

木を隠したければ森の中。と言った考えだ。優香は手早く雫に浴衣を着せていった。

「おーおー。早い早い」

あつと言つ間に雫の浴衣を仕立てた。それから自分の浴衣を仕立てる。雫が手伝つことなく着て見せた。こんな技を持っているとはと雫は感心しきつていた。

「よし、慧の追跡にレッツゴー」

右手を突き上げる。優香も恥ずかしそうに拳を挙げた。

中学校の校門の前に、慧は立っていた。ジーンズに空色のポロシヤツと来ている。時計に目をやる。五時に待ち合わせの約束をしていた。それまでまだ十分は時間があつた。校内に目をやった。

変わらない。中学の頃とはまるで変わっていないかった。からんからんと下駄の突っかける音が聞こえてきた。慧の背後で音が止んだ。「お待たせ。結構待った？」

音の主は沙弥子だった。桜柄の浴衣を纏つて、一段と女の子らしく見える。

「うっん、今来たところ」

「早いね、慧くん」

早いねと言いつつ、沙弥子も十分前には来ているところが良識ある。沙弥子を見た慧の目は虚ろだった。沙弥子は慧に声をかけた。慧ははたと我に返った。

「ごめん、ごめん。少し早いけど、行こうか」

照れながら慧は歩き始めた。沙弥子は隣を歩く。

慧は緊張していた。同級生の女の子とこうして二人で歩く、ましてや祭りで二人きりなんてことは今までなかった。女の子と言っても気がしてた妹とだったし、まして以前から気になっていた女の子

と二人きりなんて、緊張しない男はいないだろう。

「なんだか、デートみたいだね」

隣を歩く沙弥子が恥ずかしそうに頬を引っ掻いた。

デートみたいじゃなくて、デートなんだけど。慧はそう心で突っ込みながら、そうだね、と答えた。この場合のデートはたぶん付き合った者同士が二人で遊びに行くことを意味しているようで、まだ互いの気持ちを知らない二人は好き合っているものの、そんな関係には成りきれていなかった。

恐らく傍から見ればイライラしてくるだろうが、これが二人の今の関係であって、これ以上の進展にはまだまだ時間がかかりそうだ。学校のチャイムが五時を知らせた。中学校は駐車場に使われるため、屋台は歩いて五分程の小学校で展開されていた。その付近の道にも屋台が建ち並び、祭りを盛り上げる。

とりあえずと小学校に向かった。祭囃子が近づくにつれ大きくなっていった。校門から店が並び、口の時に通路が出来ていた。二人はゆっくりと店を回る。

「楽しいね、慧くん」

沙弥子は笑顔で慧を見た。慧もそれを笑顔で返した。祭りという雰囲気は、その場にいただけで人を楽しくさせる。それはまるで魔法のような時間。人を楽しく、笑顔にする。

一通りぐるりと一周し、祭りの雰囲気を楽しいだ。何か買おうかと見渡した。よしと慧が店に寄って行った。

「おじさん、ひとつ下さい」

沙弥子は提灯に目がいつて、慧が帰ってくるまで気がつかなかった。

「沙弥子ちゃん、はい」

差し出した慧の手には、たこ焼きが乗っていた。慧はひとつ楊枝ですくいあげ、口に運んだ。

「ん、アツ。あ。でも、おいしい」

沙弥子もそれを楊枝で挿して、すくいあげる。左手を添え、二、

三回息を吹きかけて冷ましてから口に運ぶ。それでも熱かったよう
で、アツつと声を漏らす。

「あ、うん。おいしいね」

焼きたてで熱々のたこ焼きは、こんな時にくらいしか食べる機会
がないもので、たまに食べるとかなりおいしい。別にたまにでな
くともいいが。

二人はたこ焼きをつつきながら、商店街の方に歩いて行った。商
店街でも出店が並び、提灯が掲げられている。

「商店街の方に行ったね」

「うん。追いかけよう」

雫と優香は二人の後を追ひ、四、五メートル離れて尾行を続けて
いた。実のところ、たまたま小学校の校門で発見し、後を付けてい
るのだ。五時に待ち合わせと聞いていたので、五時過ぎに行くとも
う姿はなかった。小学校に向かったと山を張り、こうして来たところ
二人を発見したわけだ。

まだはつきりと顔は見えていないが、その容姿を見る限り美人であ
ることは間違いなく、とりあえずは顔を拝むまでは付けようという
ことになった。

「・・・お腹すいた」

雫がそう漏らす。慧が出ていく前に夕食はどうするのか聞かれ、
とつさに祭りだし屋台で何か買って食べると答えてしまったのだ。
財布を見ても残金は五百円ない。今月の小遣いは漫画やお菓子で使
つてしまっていた。改めて小遣いを請求するのも恥ずかしく、口には
出来なかった。

そんな雫を横目に優香は前を歩く二人を追いかける。雫の財布事
情はよくご存じで、祭りのことなんて忘れたように買い物をしてい
た。優香はそんな雫を何度か呼びかけたが、忠告は聞いても止めず
に雫は欲しいものを買っていた。

「お腹、すいた」

「だから言ったでしょ。今月は祭りがあるからほどほどにしときな

って」

「だって欲しいんだもん。しょうがないじゃない」

まるで小学生が駄々をこねる様に言い放つ様が、何とも言い難い。子供かと思いいながら、雫の姿を見ていると手を差し伸べたくなくてしまふ。好きだから突き離せない。

「・・・もう」

駄々をこねる雫を放って、すたすたとどこかに歩いて行った。雫はそんな優香の背中を目で追う。

しまった。そう思ってももう遅い。優香の背は人の中に埋もれて、もう見えない。それに呼んだところで、大層賑やかになっているこの中届くとは思えなかった。

あの時ちゃんと優香の言うことを聞いていれば。後悔の念が押し寄せる。軽く突き放された気分だった。

「優香・・・」

こうなったら、一人でも。そう追いかけたい気持ちを抑え、当初の目的を思い出した。慧の隣を歩く相手を見るまでは。

挫けそうな心を立て直し、尾行を続行する。

少しすると、優香が早足で戻ってきた。

「はい、これ」

優香は買ってきたたこ焼きを差し出す。

「え、なに？」

「お腹、空いてるんでしょ？なら一緒に食べよう」

雫は嬉しくて、優香に抱きついた。優香もつい怒っていたのを忘れ、笑っていた。

次第に二人の距離は縮まっていた。人が増えてきて、歩く道も人で狭くなっていた。肩が何度かぶつかり、そのたびにお互い謝っていた。

先を歩く慧が道を開き、その後ろを沙弥子が付いていく。そんな感じで狭いところもすり抜けていた。

慧は沙弥子を気遣いながら、先を歩いていた。きゅんと後ろで声

がした。瞬時に振りかえると、態勢を崩した沙弥子が前につんのめり扱けそうになっていた。

「危ない」

慧は咄嗟に手を差し伸べ、沙弥子も慧の手を握った。それで何とか扱けることは回避し、慧も安堵した。

「大丈夫？」

「うん。ありがとう」

少しその場から離れ、人の少ない通りに行く。屋台は出ておらず、提灯もない。辺りの暗くなっていて、何とか屋台やら提灯やらの明かりが洩れてきて見えないほどではない。

「あ」

二人は示し合わせたように声をあげた。繋いだ手を離し、即座に手を引つ込めた。互いに顔を赤くして、互いの顔さえも見れない様子だった。

大丈夫ともう一度問うが、沙弥子は大丈夫と小さく頷いた。このままこんなところにいるのも何だと思い、再び通りに戻る。やはり人は多く、すぐに逸れてしまいそうだ。

慧は息を吐き、覚悟を決めた。隣に立った沙弥子の手を取った。緊張が最高潮になった。心臓の高鳴りが聞こえる。恐らく顔も真っ赤だ。それでも慧は手を離さずに笑顔を向けた。

「行こうか」

顔が引きつっていたかもしれない。それでも慧は勇気を出して、沙弥子の手を握ったのだ。沙弥子も照れながら、はいと答えた。

「手、握ってるね」

「うん、握ってる」

遠目で観察しながら雫と優香は、手を握ったことを確認する。二人とも内心かなり取り乱していて、それを隠そうと冷静さを保っていた。

「慧さん。すごい照れてたね」

「うん、照れてた」

淡々としたやり取りを交わしながら、二人の後を付けていく。未だに顔を見ることは出来ておらず、誰なのかも検討がついていない。尾行開始から二時間。二人は慧たちそっちの形で、祭りを楽しんでいた。姿を見失うたびに探し、見失うたびに探しを繰り返していた。だから、まったく進展はしていない。

それとは大きく異なつて、慧たちは進展していた。手を引いて歩く慧を見て、沙弥子の心臓は未だに鳴りやまないでいた。聞こえるのではないだろうかと思うほどに鼓動し、抑えるのに必死だった。

緊張でどの店を回ったのかとか、展覧は何を見たのかなんてことはすっかり飛んでしまっていた。手を握られていることもあり、更に緊張は増していくばかりだ。それでも徐々に慣れ始め、何とか動悸は抑えられていた。

「少し、休憩しようか」

そうして慧が公園の中に連れていく。ベンチに沙弥子を座らせて、飲み物を買いに走って行った。すぐ近くの自動販売機でお茶を持って帰ってきた。それを沙弥子に渡す。

ありがとと受け取り、お茶を飲む。火照った体に沁み渡る。一息つき、慧もベンチに腰掛けた。腕時計に目をやった。

沙弥子が落ち着いたのを見て、慧は立ちあがった。

「そろそろ行こうと思うんだけど、大丈夫？」

沙弥子はすつと立ち上がった。疲れていないと言えば嘘になるが、定期的に休憩をとってくれたお陰で動けないということはない。

「うん。大丈夫だよ」

二人は中学校の方に歩いていった。

自然と手を繋いでいた。それが不思議だった。気がつけばどちらからでもなく、手を取っていた。それで何となく心が和らいだ。さつきまで緊張していたのが嘘のように、大らかな気持ちになった。

中学校を過ぎ、その隣に流れる河川の土手道で慧は止まった。

「そろそろかな」

時間を見ながら、対岸を見つめた。

「それではこれより花火の打ち上げを開始いたします」

そう拡声器から告げられ、花火大会が開始された。

最初の一つが空に上がって行く。高く上がった光の玉が、空に大輪の花を咲かせた。どんと轟く。周りからは歓声があがり、二人も撃ちあがる花に目を奪われた。

二人を付けていた雫と優香も花火が上がるとそれに気を取られ、そちらにばかり目がいつていた。

二人は完全に慧たちのことを忘れ、夜空を見上げていた。ちらりと慧が振り向く。それで二人を見つけてしまった。実際は付けられていたことを知っていた。

前を向き直り、くすつと笑う。どうしたの？という沙弥子の問いに、何でもないと答え、またくすりと笑った。沙弥子はどうして慧が笑っているのか分からず、それもどうでもよくなって、夜空を見上げた。

そこに多くの光の花が咲いていた。

学校が始まってから、彼女は彼の自宅に赴いた。今日は二学期始まったの初の日曜日。場所は大体知っていたし、真由美も付き添ってくれた。

「うー、緊張する」

沙弥子はそう漏らしながら、真由美と土手道を歩いていた。中学校はまだ先で、そこまでは行かない。真由美の家は中学から近く、慧の自宅からも歩いて五分のところ。だから真由美と慧は小学校からの仲で、本人たちは腐れ縁と思っていた。真由美にとって慧は恋愛対象に入らず、どう考えても友達以上には発展しなかった。

小学校の頃、名前で虐められていた慧は女友達がおらず、真由美一人だった。正確には女の子のいると更にからかわれるので、一緒に居たがらなかった。それでも真由美は別で仲が良かった。家が近

かったこともあり、下校は一緒。真由美から見れば、慧は弟のような存在だったに違いない。

慧には妹がいた。可愛らしくて、慧によく懐いていた。それが義兄妹と知ったのは中学に上がってからで、それまでは仲の良い兄妹だと思っていた。真由美には兄弟がおらず、そんな慧が羨ましかったのかも知れない。

小さいことから男に負けたことはなかった。かけっこも勉強も喧嘩も何もかも。男勝りな女の子だった。だからなのか、虐められている慧を放っておくことが出来ず、知らないうちに手を貸していた。慧が虐められていると飛んで行き、虐めていた男子を一蹴。それで何度か泣かして、先生に怒られたこともあったが、そんなこと些細なものだった。

私は正しいことをしている。その気持ち自分が自分を満たしていて、気持ちよかった。自分勝手な正義感。それが分かったのは高学年になってからだったが、それでも自分が正しいと信じて止まなかった。「ありがとう」

慧を助ける度にかげられるその言葉。それを聞くためだけに何度も手を貸して、何度もその言葉を味わった。

正直に嬉しかったのだ。誰かのために動き、そして感謝される。それが一番の楽しみだった。

「何言ってるの、ここまで来といて。今更やっぱ無理はなしにしてよ」

真由美にとっても慧の自宅に上がったことはなく、これが初めてだ。そう思うと緊張してきてしまう。慧には今日行く約束をしていたので、何も勝手に行くわけではない。

「おかしくない？」

昨日は真由美の家に泊っていた。両親は了承済みだ。九月といってもまだ少し気温は高め。それでも平年よりは低く、半袖だと肌寒い。

膝下まである空色のスカートに、白地に某ネズミのイラストがプ

リントされたＴシャツ。それに黒のジャケットを羽織っている。真由美はジーンズに青いパーカーというラフな格好だ。足元も白のリボンがついた可愛いサンダルと比べ、同じく白いがスニーカー。二人はすぐに慧の家の前まで辿りつき、チャイムを鳴らした。

「ちょっと。もう？」

沙弥子を放っておいて、真由美は呼び鈴を押した。すぐに扉が開いて、中から慧が出てきた。

「おはよう。時間ぴったりだね。上がって、上がって」

ジーンズに長袖のＴシャツ姿で、つかかけを履いて出てきた。金門を引いて、二人を中に招き入れた。玄関から居間に至るまで、綺麗にされていた。散らかっているところは一つもない。

リビングに案内され、慧はキッチンに立った。三人分のお茶を入れ、居間に戻ってくる。入れてきたのはレモンティーだ。

「ありがとう」

紅茶の香りが漂ってきて、良い気分になる。一口飲み、おいしいと笑った。

「いいな。私も飲みたい」

二階から降りてきた雫が慧に言う。その時、二人と目が合った。一人は金子真由美。近所に住んでいる一つ上の慧の友達。もう一人は・・・。

あっと思わず声をあげてしまった。一目見ただけで直感した。祭りと一緒に慧といった女の人。雰囲気も体系もあの時の人と同じ。

「はい、雫」

慧は雫にカップを手渡した。

「妹の雫。今年高校一年で、同じ高校に通ってるから」

二人ともそれは知っていた。可愛い下級生が入学してきたと男子たちの中では専らの噂だ。確かに面と向かって見ても、整った顔立ちで、雰囲気も服装も女の子らしく可愛い。

真由美も実際に見るのは中学以来で、また一段と大人になったなあとと思う。沙弥子にしてみても、妹にしたいと思うほど可愛い。

「真由美は知ってるだろ？」

うんと雫は頷く。真由美も覚えてもらい内心ほっとする。

「それでこつちが、芦田沙弥子ちゃん。同じクラスで副委員長」

芦田沙弥子。名前は知っていた。クラスの女子が一つ上にすごい美人がいると言っていたからだ。遠目からは見た事あったが、こうして間近で見るのはこれが初めて。

お互い初の顔合わせだった。実際は入学式の時顔を合わせていた。それでも意識して見たのは今日が初めて。

お互い軽い会釈をして、雫はソファーに腰掛けた。隣に真由美が座り、反対には慧が座った。真由美を挟んで、二人の間に気まずい雰囲気が漂う。それを察したのか、真由美はカップをテーブルに置き、席を立つ。

「トイレ貸していい？」

「うん、こつち」

そう言つて慧と真由美はリビングを出た。二人だけになり、更に気まずくなる。

「あの・・・」

沈黙を破るように雫が口を開いた。質問を投げかけた。

「慧。兄は学校ではどうですか？」

何てない質問だ。しかし、それは気になっていたし、そんなことが聞ける上級生は彰信を除いて他にいない。それに彰信は雫に氣を使っている節があり、うまくごまかされたりしてしまう。

慧に氣を使われていることは以前から知っていた。料理もその内の一つだ。自分が怪我しないようにと、やらせてくれるのは混ぜるか潰すかそんなことばかりだ。包丁なんて滅多に握らせてくれない。確かに経験は浅いけれど、過保護過ぎて参ることも一度や二度ではなかった。それが優しさから来ていることは知っていたし、それを嬉しくも思っていた。

「どうつて？」

「例えば、居眠りしてるとか。喧嘩とか。勉強とか」

慧が優秀なことは知っていた。でもテストで何点取ったとか、誰かと喧嘩したとか、そんな話は一切出てこない。毎朝朝食と弁当を作り、夜は遅くまで勉強している。学校で居眠りなんてしていないかという心配もあった。

「居眠りは見たことないし、喧嘩も。勉強はいつも予習してきていて、復習も完璧。答えられない問題なんて滅多にないけど。それにいつも優しいし、誰も見てないところで気を使ってる」

笑顔で楽しそうに語る沙弥子を見て、雫は羨んだ。一つ違うだけで、こうも一緒にいる時間が短くなる。家では一緒でも、学校では滅多に顔を合わせない。

だから、学校での様子は分からないし、知らない。知りたいとは思っていても、話せる人はほとんどいない。

今日はそれを聞く絶好のチャンスだった。実際、慧が自宅に入れた同級生は友沢彰信以来、久しいことだったからだ。

「沙弥子さんは兄をどう思いますか？」

この言葉は沙弥子に動揺を与えた。聞かれた瞬間びくりと体が跳ねたと同時に鼓動が跳ねる。あ、う、と言葉を濁しながら、顔を赤くしていく。

「や、優しいと思う・・・」

小さな声で呟くように答えた。それで、あーこの人は慧のことが好きなんだなあ、と実感した。

トイレから真由美が戻り、ソファアに座る。慧は？と問うが二人はだんまりだ。少しして、階段を下る足音がして慧が戻ってくる。両手には複数の本が持たれていた。それをテーブルに置く。

「これ、僕のお勧め。借りたいって言ってたから。前に読みたいって言ってた本」

そう言つて、一冊の文庫本を手渡す。沙弥子は恋愛小説を主に読み、必ず一冊は携帯している。慧が渡した本もある女性作家のデビュー作品だ。ある災害に巻き込まれる高校生と自衛官の物語だ。

「ありがとう。覚えててくれたんだ」

表紙を眺め、それからページを開いていく。沙弥子はすぐに本を読み始め、真由美も一冊の本を手についた。これもある人気作家の小説で、逃亡者を描いた作品だ。映画化もされ、有名な役者が多数出演していた。

慧も本を開いて読み始めた。国営放送の記者が書いた小説だ。居間の空気が一瞬にして静まり返った。紙をめくる音しかない。

そんな中、雫はじつと三人の様子を眺めていた。

雫にとって本はあまり興味の対象ではなかった。慧がよく読んでいたので手には取って見るものの、すぐに飽きてしまう。活字離れた現代人の象徴のようになっていた。

それに比べ、慧と沙弥子は本の虫。真由美も本は比較的好きで、二人程ではないが暇なときは読んだりする。面白いと思うし、最後まで読む。

三人は無言で読書を続け、それに溜まりかねて雫は席を立つてしまった。そして、自室に戻ろうと静かに階段を登っていった。

その様子を慧は横目で確認し、慧も席を立つ。物音をたてないように二階に上がって、雫の部屋をノックする。

「雫。入るよ」

部屋に入ると雫はベッドに横になっていた。つまらなさそうに慧を見た。

「何？」

「もしかして、怒ってる？」

慧も雫の様子を察したのか、単刀直入に聞いてみた。

「別に、怒ってない」

枕に顔を埋めて、布団を手繰り寄せた。そうして寄せた布団をかぶり、団子虫のように丸くなった。

怒ってる。と言うより、不貞腐れてるかな・・・。

慧はこの場合放っておくのが一番良いと判断し、静かに戸を閉めて一階に降りた。読書中の二人は、慧に目も向けず読書を続けた。

昼食は慧がご馳走し、午後からはどこか外に行こうとの提案が出

された。出したのは真由美で、雫はお昼から優香と買い物約束をしていた。

「気をつけてね」

そう言つて雫を送り出し、慧たちも支度をする。真由美と沙弥子は一端家に戻り、沙弥子は荷物をまとめ、真由美は着替えに戻つた。二人は自転車に跨つて慧宅へ。慧も自転車を持ち出す。

高校生にとつて最大の移動手段は電車と自転車。バスもそれに入るが、なんせ田舎なだけに一時間に一本が限界。それは電車でも同じことが言えるのだが、移動距離と値段が違う。雨や雪ならそれも考えるが、晴れている日に自転車を使わないのは少し気が引けた。

どこか行くといつても、田舎のこの町は何もない。ショッピングモールが辛うじて一つあり、映画館も遊園地もここにはなかった。三人は駅に行き、沙弥子はコインロッカーに荷物を預けた。

電車に乗り込む。ゆつくりと景色が動き出し、流れていく。山中を走る電車の窓からは草木や河川が見えた。トンネルを抜けても大して景色は変わらず、田舎のままだ。三十分もして、やっと様子は変わっていた。建物が増え、自然は激減していった。コンクリートのビルや住宅街が窓から見える。

一時間くらい電車に揺られた。駅に着いたのが二時半過ぎで、駅を出て街に繰り出す。若者に人気の街で、おしゃれな店がずらりと並んでいる。三人はそこで何をするでもなく、店を見て回つた。

沙弥子と真由美がよく気を取られていたのが、装飾品の店だ。あれが可愛い、これが可愛いと目移りし放題。でも、どれも値段を見て、高いと嘆いていた。

いい加減二時間も歩くと足が疲れ、近くのファミレスで休憩した。ドリンクバーを頼み、各々好きな飲み物を入れてくる。

「はあ、いっぱい見たー」

真由美はジュースを一気に飲み干した。

「楽しかったね」

笑顔で満足そうに沙弥子は頷いた。

「でも、高すぎ。あれじゃ高校生の小遣いじゃ買えないって」

「だよ。私もあれ買っちゃうと、本買えなくなるし」

沙弥子にとって本はアクセサリよりも大事ならしい。慧もそれは一緒に、欲しい本があれば必ず買う。それで服が買えなくてもだ。

「バイトでも出来れば良いのにね」

「うちの高校はアルバイト禁止だしね」

真由美は高校に入ってアルバイトをしようと思っていたが、一年生の初めのホームルームで、バイトは禁止と釘を刺された。実際、生徒手帳にも記してあり、見つかつて停学を受けた生徒もいた。もちろん生徒はバイトを強制的に辞めさせられた。

唯一認められているアルバイトは、郵便局でのアルバイトだ。期間は年末年始二週間。それで四万以上は稼げるが、かなりきつい。雪の中を自転車で配達しないといけない。それに年賀状はかなり多く、かなり重い。何気なく受け取っている年賀状は、そこに届くまでかなりの努力がある。

それに二週間のうち休みは二日で、年末年始は休めない。その時が一番ピークで忙しい。大半が力仕事なので、男性が大半だ。女性でバイト希望なら事務に戻されていた。葉書の仕分けだ。部落ごとに分類し、それをまた同じ住所で纏めていく。

「郵便局は嫌だしね。聞いた話じゃ結構しんどいって」

真由美は落胆し、テールに頬を付けた。そう言った慧ももう二度としないと決めていた。毎日八時には出勤し、五時までは仕事。おまけに配達ルートを暗記し、毎日二階の配達。自転車で二時間以上は走り回り、休憩はお昼と途中で何度か軽いもの。

朝が早いので年末年始は夜更かしできないし、帰ったらクタクタで遊ぶ元気もない。それに雪が半端ではないので、配達も命がけだ。こけたら葉書をぶちまけることになる。一度、自転車を倒して葉書をばら撒いたことがあった。葉書は無事だったが、自転車を止めている時でさえ、気が抜けなかった。

割に合わない。それがこの仕事だ。

ファミレスで一服して、再び街に繰り出す。慧と沙弥子の希望で、本屋に寄って時間をつぶした。地元にある本屋とは規模が倍近くある。

六時を回ったところで真由美の提案で帰宅することになった。このまま放っておいたら、閉店まで気付きかねない。二人の背を押しながら店を出て駅に向かった。

地元に戻り、駅でお開きとなった。沙弥子の家とは方向が違うことから、慧たちとは別れた。慧が送ろうか？と問うと、帰るのが遅くなるから大丈夫、とそれを断った。各々自転車に跨って、家路を走った。

そして休みが明け、学校に向かった。

昼休み。いつものように食堂で弁当を広げて慧と彰信は昼食を取っていた。そこに沙弥子と真由美も同席した。弁当が空になった頃合い。真由美は職員室に用があるとかで、席を立ち、彰信も野球部の監督に練習メニューを聞きに出ていった。

何となく二人になり、そろそろ教室に戻ろうかと席を立った。

「昨日は妹がね。本を貸してって部屋に来て、貸したんだけど。結局、一時間もしないうちに返しに来て。一時間じゃ到底読めないんだけど。やっぱ、途中で飽きたみたいでさ」

「そう言えば、昨日貸した本も一度妹が手を出して、すぐやめたんだ」

「そう言えば一昨日テレビで活字離れの現代人なんて番組がやってたけど、まるで妹見てるようで、笑っちゃったよ」

廊下を渡って、教室の前に立つ。先に行く沙弥子は扉の前で止まっていた。

「どうしたの？」

そう問うが、返事は戻ってこなかった。沙弥子は踵を返し、どこかに向かって歩き出した。慧も心配になって後を追う。渡り廊下の途中で思わず腕を取ってしまった。

どうしての？と投げかけたが、俯いたまま黙秘を続けた。慧も黙

つてしまつて、聞こえてくるのは雑音だけ。廊下に他の生徒が来る気配はなかった。

「え……」

思わず声を漏らした。慧は動揺し、掴んでいた手を離した。

泣いていた。沙弥子は泣いていたのだ。その原因が慧には見当たらず、いったい自分がいつ何をしたのか。記憶を漁った。

分らない。見つからない。いったい何をした。何か言ったか。

自分ばかり話していたから気を悪くしたのか。いや、気を悪くしたなら怒るはずだ。なら、無意識のうちに酷いことを言ったか。

声を殺して泣く背中はとても愛おしかった。ここで抱きしめたら、どこかのドラマか何かの恋人のようだ。でもそんな覚悟も関係もない二人にそれはどうかと思う。

「……ごめん」

知らずのうちにそう呟いていた。何か言わなければ。その一心で出た言葉がこれだ。それでも涙は止まる様子はなく、背中をむけたままだ。

「どうして、謝るの」

弱弱しい声が耳に入った。聞きとることも困難な程に小さかった声が確かに慧の耳には聞こえた。はつきりと。

だが、その答えを知らなかった。分からなかった。咄嗟に出た言葉。だから、今度は慧が黙ってしまった。

「ずるい。ずるいよ」

言いながら振り向いた沙弥子の目には涙が溜まっていた。頬を伝いながら、こぼれ落ちていく。それで更に罪悪感が増した。本当に泣いていた。だから、原因が何なのかはさて置いても、慧が原因で泣かせたことには変わらない。

ごめんと俯き加減に謝った。謝るしかなかった。泣いている相手をどうしていいのかわからない。それは何度も経験したことだが、未だに慣れない。

泣いている雫をいつも見ていることしかできなかった。それでい

つしか雫は泣かなくなった。慧の前では。

自分の妹でさえ、どうしていいのか分からない慧にとって、それよりも相手のことを知らないのだから、打開のしようがない。

「慧くんは、いつも優しい。誰にでも。どんな仕事も嫌な顔一つ見せないでやって。一緒にやっている人の分まで手伝って」

とぎれとぎれに放つ言葉の度に涙がこぼれていった。その瞳はじつと慧を捉えていた。慧は俯いたまま、じつと聞いていた。

「だから好きになった。そんな慧くんが好きだった」

それで慧の顔は上がった。驚いて顔をあげた。その際、目が合っ
てしまい、そこから離せなくなった。

「でも。私がいても、誰と一緒にでも。いつも雫ちゃんのことを見ていた。話に出てくるのはいつも雫ちゃんのことです」

嗚咽が混ざる。より一層涙が流れだして、止まらなくなった。

「目は私を見ていても、心は雫ちゃんを思ってる」

騒ぎを聞きつけ、野次馬が集まりだした。廊下を挟んで野次馬たちがじろじろと見てくる。沙弥子と挟まれて、更に慧は気まづくなる。

これ以上ことを大きくしないでくれ。たぶん、僕は悪者に見えてるんだろうな。

卑下したところでこの状況は打破できない。解決されない。でも、それが気になってしまう。

「あの・・・」

この状況を何とか解決しなければ。その思いで声をかけたが、その後何を書いていいのかわからない。ぐっと口を結って、言葉を考える。

「・・・私を。私だけを、見ていてほしい」

いつになく迫力のある目で更に訴えかけられる。それは彼女の強い独占力だった。

「それは・・・」

「私と付き合ってください」

愛の告白だった。辺りからはからかいの聲が、驚きの聲が上がり、辺りは騒然とする。

告白された。高校に入ってから、いつも憧れていた女の子に。嬉しかった。でも、何かが心に引かなかった。

「ごめん、あのね」

そう言いかけて、沙弥子はぐつと歯を食いしばって、怖い顔になった。そうして、慧に背を向けて走っていった。

沙弥子を避けようと野次馬の集団は道を開け、その中に沙弥子は走り去って行ってしまった。

結局、午後の授業には戻ってこず、優等生の彼女には珍しいことだった。教員も理由を聞くが、決まって慧の方をみんなが見る。授業中も何度もちらちらと見られ、休み時間になると決まって廊下に集団が押し掛けた。

慧はそれに耐えかねて、六時間目の授業には出なかった。図書室に逃げ込み、生徒が帰るのを待って、下校した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7230k/>

雪の降る街

2010年10月10日22時17分発行